# 化物語（次）

どらごん５６４

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
化物語（次）

【Ｎコード】
Ｎ３５４８Ｖ

【作者名】
どらごん５６４

【あらすじ】
阿良々木暦と阿良々木ひたぎの子、阿良々木三ヶ月（アララギミカヅキ）。
父がかつて、最強の吸血鬼であり、怪異殺しの元・キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属だったこともあり、三ヶ月の中には四分の一ではあるものの、その血が流れている。
・・・ことを『ある事件』で聞いた。
あれから、数年とはいえないが、何週間か過ぎた。
肩に残ってしまった、髑髏が頭から釘を生やしている痣だけは残ってしまったものの、それ以外は不自由はない。

しかし、外に出るとそこは、両親達が学生時代の世界で・・・・。
青春は、時には振り返る思い出でもある。
「僕は捻じ曲げてやるさ。かえらんねえ運命なんてねえんだ。
どうせ手に入れた力なんだ。運命くらい、僕が捻じ曲げてやる」

## ひたぎクラブ０１（次）（前書き）

どうも。
他の作品をすっぽかして投稿してみました。
原作ブレイクなところが多いかもしれません。
そういうのが許せる方のみ、読んでいただけると嬉しいです

## ひたぎクラブ01（次）

ハジメマシテ。

阿良々木ハーレムを築き上げた、伝説の男・阿良々木暦と深窓の令嬢と呼ばれていた、阿良々木ひたぎの息子・阿良々木三ヶ月（↑ミカヅキと読みます。）。

現在、直江津高校二年生。

家族構成はとーさんと、かーさんとスタイルがもう中学生と言えず、完全に美女としか言いようがない妹の卯月（うづき）ととーさんの影に住んでいる、「お姉ちゃん」。

これが家族構成。

わけあって、とーさんは不死身体質。

それに「お姉ちゃん」が関わっているんじゃね？なんて僕は思っているわけだけど、きっとそうだ。

頑なにとーさんの恩人である、羽川さんはその事について語らない。

きっと、とーさんが何かしでかしたに違いない。

とーさんは、・・・変態と言う名の紳士ではないはずだから。

八九寺ちゃんに聞いた。（むしろ、ちゃん付けしていいものかと悩んだが、八九寺ちゃんは承諾してくれました。ありがとう！八九寺

ちゃん！）

ということで、本題に入りたいと思います！

「ミカー、起きろー」

この声は、上半身ジャージで下半身がミニスカートという、滅茶苦茶な服装でしかも、隣町までに名を轟かせている、「栂の木中の無双月」という変な二つ名を持つ妹である。

叔母である、月火ねーちゃんや火憐ねーちゃん（叔母であるが、とーさんに強要されております。「僕の妹はまだオバサンではない。」と主張していた）と同じらしい。

そのことを話す度に懐かしそうな顔になる。

大人って分からない。

そさくさと着替えて、用意をする。

「ミッカー、あのさー、ヴォルデモートの最期って最悪よね。原作と映画じゃ、かなり違うみたいよ？
原作は武装解除されて逆噴射でやられてるけど、映画のほうも映画のほうよね。見に行ってないけど。」

「見に行ってないなら、何故そのネタを振る！？

我が妹ながら、恐ろしい奴。

この間、隣町の番長という時代遅れの産物と一戦交えた時だ。

ハリー・ポッターの話題を振って不意打ちしたとか。

しかも、その一味もろとも。

使用したのは、火憐ねーちゃんのように素手ではない。

金属バットである。

釘バットではない。

金属バットだ。

此処重要！

「うるさいぞ、三ヶ月。お前、いつのときの我があるじ様じゃ。仕方ないのう、ポンデリングで許してやらんこともない。ゴールデンファッションでも良いぞ」

金髪幼女が扉を開けて入ってきた。

お姉ちゃん———忍野忍さんである。

彼女は忍と呼ばれるのをとーさんにしか許しておらず、かーさんに関しては話したところも見たことがない。

やれおそろしや。

風呂も一緒に入ったことがあるという。

駿河のおねーちゃん曰く、山であんなことやこんなことをしたとかしてないとか。

畜生。

なんていう父親を持ってしまったんだ。

「諦めろ、三ヶ月。わしは知っておるぞ。三ヶ月の良いところを」

おねーちゃんは僕の肩にポン、と手を置く。

そもそも、影から出られなかったんじゃなかったっけ？

とーさんの。

妻公認不倫である。

「三ヶ月ー、金堂って人が来てる。」

下から、とーさんの声がする。

金堂籌（こんどうかがり）。

とある事情で彼女は僕の『正体』を知ることになった人間の一人でもある。

おねーちゃん――――――忍野忍は怪異の王であり、鉄血で熱血にして冷血の最強の吸血鬼。（フレーズが間違ってるだって？大丈夫だ、気にするな。）

とーさんは一時期、その最強の吸血鬼、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属となった時期があったと言う。（そのときのことをおねーちゃんは照れくさそうに語る。なぜ？）

四分の一であるが、僕にはその吸血鬼の血が流れている。

それはさすがに、僕も大袈裟なリアクションをとらざるを得なかった。（突っ込まれたけどね。両親とおねーちゃんに。）

「ミカちゃん、入るよー？」

金堂先輩の声だ。

「おねーちゃん！」

「なんじゃゃ、三ヶ月。あまり見るでない」

照れくさそうな、おねーちゃん。

なんで、照れるんだ！？

「入るよー」

二回目要らん！

「…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………」

立ち尽くす、金堂先輩。

それはそうですよね。

だって、朝、後輩を迎えに来て部屋に入ったら、金髪幼女と話してますし。

## ひたぎクラブ０２（次）（前書き）

第二話です！

## ひたぎクラブ０２（次）

「かがりん先輩ー？」

かがりん先輩は動かない。

「ま、まあ、取り合えずいこっか。」

とりあえずってなんだよ！？

しかし、一々突っ込んではられない。

一々突っ込んでいると、それだけで話が終わってしまう。

僕より背が高いくせに、卯月よりアホなのだ。

言っちゃ悪いけど。

「行ってきまーす」

「いってらぁ～」

卯月の声が聞こえる。

普通にしていたら可愛いのに。

とーさんの靴はもうない。

仕事にでも行ったのだろうか。

時間は時間だしな。

僕は扉を開ける。

いつものように、改造しまくりのマウンテンバイクのチェーンを外すべく、そのマウンテンバイクが止められている所に向かう。

・・・・・・なかった。

変わりに新品のマウンテンバイクが。

「・・・・・ない。僕のマウンテンバイクがない！」

高かったのに！

怒られる！

特にかーさん！

ぶるぶる。

門の形を見る。

それは、ウチの門ではなかった。

とーさんが住んでた、家の門である。

「なにがなんだか分からないケド、取り合えず学校行こう・・・・」

時間は８時。

ヤバいっ！

僕は全力疾走で学校に向かうことに。

遅刻だけはしたくねえ！

## ひたぎクラブ０３（次）（前書き）

結構な文章の三話目です！

## ひたぎクラブ０３（次）

なんとか、着きました。

螺旋階段を全力疾走で昇っていると、上から何かが落ちてくる。

「！？」

女の子だった。

美少女というより、美女と形容したほうがよさそうな。

そのまま、落ちるのを見過ごす訳にも行かないので、僕は彼女を受け止めることに。

でも、その彼女には――――――全くと言っていいほど、重さがなかったのだ。

その後、僕は二年生の教室に向かった。

「先輩、ここは二年生の教室だぞ？」

朝練が終わったのだろうか。

ショートカットの女子が僕に声をかけてきた。

なんというか、駿河のおねーちゃんにそっくりだ。

「でも、僕は二年だけど・・・」

「先輩はつまらない冗談を言うのだな。そのカラー、三年生のじゃないか。」

確かに、彼女の履いている上靴と僕の履いている上靴の色が違っていた。

考えたくはなかったけれど、もしかすると。

ここは、『とーさんとかーさんの学生時代の世界』、そう、過去なのかもしれない。

２０年以上も前だけど、そうだとするなら、僕はまだ存在すらしていない。

仮にそうだとしても、僕が三年生のクラスに行っても出席簿とかに名前があるのだろうか？

行ってみよう。

＊

そして、僕は三年生の階に来た。

クラスがどこか分からない。

そうだ、誰かに聞いてみよう。

「すいません、クラスが分からないんですけど・・・・」

僕が声を声をかけたのは、三つ編みでメガネの真面目そうな女の子だった。

「え？阿良々木くんだよね？」

「え、あ、はい。」

「おはようは？」

「お、おはようございます」

「おはよう。珍しいね、阿良々木くんが敬語で私に話しかけるなんて。クラス、忘れちゃったの？」

忘れたもなにも。

ていうか、僕が阿良々木だって知ってるんだ・・・。

あ、そっか。

僕は異様なまでに一方通行（アクセラレータ）に似てるといわれるけど、それほど狂ってないはずだ。

白髪じゃないし。

狂ってないし。

たぶん、とーさんだと間違えてるのではないだろうか。

「まあ、うん。忘れた」

「もう、仕方ないわね。こっちだよ」

女の子は仕方なさそうに、だけど、少し嬉しそうに僕をクラスの前に連れてきた。

案内された教室に入ると、異様なまでに僕にそっくりな男がいた。

僕の父、阿良々木暦である。

「あ、おはよう。阿良々木くん」

「おはよう、羽川。そっちは・・・・って、僕！？」

ヤバイ。

バレタか。

異様なまでにとーさんに似てるといわれる。（身長以外）

すごく勘が鋭いらしい、と火憐ねーちゃんが得意げに語っていた。

うーむ。

なんとごまかしたものか。

「やだなあ、何を言うのかと思ったら。」

眼鏡で三つ編みの彼女は続ける。

「人の名前が全く、覚えられないことで有名な、『赤目の豪雨降(ごううふらし)』くんだよ。」

「『赤目の豪雨降(ごううふらし)』・・・？そんな男子いたっけ？」

「たぶん、阿良々木くんは知らないんじゃないかな？男子と話したことないからね。知らなくても無理はないと思うよ。」

そして、彼女は爆弾発言をする。

「だって、豪雨降(ごううふらし)くん、転入生だし」

放課後。

眼鏡で三つ編みの女の子曰く、今は文化祭前だとか。

委員長なので、その準備をしているらしい。

ちなみに、とーさんは副委員長。

『更正させるために』副委員長に任命したらしい。

だが、僕は理由を聞いたことがある。

・・・忘れました。

「自己紹介が遅れたね、私は委員長の羽川翼。こっちが」

「副委員長の阿良々木暦。」

よ、よろしくの一言もねえ・・・・。

昔はこんなヤな奴だったのか、マイファーザー。

「僕は、豪雨降三ヶ月（ごううふらしミカヅキ）と言います。」

「最初、変な名前だと思ったけど、結構フツーの子だったから、ビックリしたよー。」

『豪雨降（ごううふらし）』。

どうやら、この過去の世界では僕はこれを名乗らなければならないらしい。

不思議なことに、僕はいつものように『アララギ・ミカヅキ』と自己紹介するときに言わなかった。

トラベル・マジック。

不意に、何故か外を出たい気分になった。

「ごめん、羽川。ちょっと、手洗い場に」

「トイレ？仕方ないなあ、早く帰って来てね？この学校の事はなしておきたいし」

僕は外に出た。

「羽川さんと何を話していたのかしら？転校生くん。」

僕の頬に当てられた、刃。

おそらく、カッターナイフだろう。

「・・・」

言葉が出ない。

「何もいえないということは、私のことを聞いたようね。このニキビも何もない頬をぬらしたくはないでしょう？転入して間もない他人に秘密がばれるとは思わなかったわ。」

「ばれるばれない以前に、フツー、カッターナイフなんて頬に当てんのか？」

「あら、この状況でよく言うわね。ただの単細胞生物でしかないのに。」

僕がクマムシかなんかだと言うのか！？

にしても、この女、鉄面皮だな。

表情を感じさせない。

がじゃこっ。

「く、くはぁ・・・」

「どちらにしろ、明日からは私を無視してよね、土砂降り君。」

似てるけど、少し違う。

口の中にホッチキスで綴られたけど、この程度なら平気。

『簡単』に治るから。

これでも、無駄に伝説の吸血鬼の眷属の血を引いてる訳じゃないんだ。

僕はすかさず、追いかける。

「あ、豪雨降(ごうふらし)くん！廊下は走っちゃ駄目だよ！」

羽川のそんな声がするけど、僕は俄然無視。

走らなきゃいけない気がするから。

走っていくと、さっきの女の子はまだいた。

「なにか、勘が鋭そうな子だと思ったら、それだけではなかったようね。」

彼女は文房具を構える。

アロンアルファ。

カッターナイフ。

コンパス。

ボールペン。

ハサミ。

定規。

他諸々・・・。

「戦争を、しましょう」

彼女は文房具を全身から取り出して、僕と距離を詰める。

「そんなつもりはない。」

「なんですって？」

「あんたを助けられると思って。」

「私に対して、そんな風に言ったのはこれまで5人ほど居たわ。証拠でもあるのかしら？土砂降り君」

相変わらず、名前を間違える。

「！？」

彼女が驚くのも無理はない。

僕は自分の口内にある、ホッチキスのピンだろうか？

そんな名称のものを取って、ポケットに入れた後、それを見せたの

だ。

「な、治ってる・・・・」

その後、彼女にその人物について教えろ、とせがまれ、聞いた事のある、『あの場所』に向かった。

そこは、今は無き学習塾の廃墟である。

そこに住んでいるのは、とーさんの知人・忍野メメ。

怪異のオーソリティ。

専門家。

吸血鬼の件で、とーさんを『助けた』のは間違いなく、彼であると言う。

いや、助けたと言ういい方を彼は嫌うらしいが。

「一ついいかしら？土砂降り君」

「名前のことについて訂正したいけど、今はいいや。なんだよ？」

「こんな所に私を連れ出して、いかがわしい行為を私にしたら、ボーイズラブな仕返しをするわ。」

「そんなことはしないよ。そもそも、ボーイズラブな仕返しってなんだ・・・」

辺りは昼間だけど、暗い。

僕は少なくとも『見える』。

彼女は見えないだろうから、僕のカバンの紐を握ってろ、と言っておいた。

案外、素直にカバンの紐を握っていた。

三階。

そこに、ドーナツ愛好家にして怪異のオーソリティ、忍野メメがそこにいた。

「やあ、来たね。待ちくたびれたよ。水浸しの四分の一君。」

水浸しの四分の一。

それは、たぶん、僕のことだ。

「たぶん、それは僕のことを指しているんだろうけど・・・。」

「うん？今日は女の子を連れてるじゃないか。見たところ、同級生かな？」

「土砂降りくんの同級生の戦場ヶ原ひたぎです。」

戦場ヶ原ひたぎ！？

戦場ヶ原と言うのは、かーさんの旧姓だ。

ということは、この女は・・・・。

「土砂降り君というのは、なかなか言い得て妙だね。水浸し君が女の子を見せびらかしに来たのなら、僕は君を甘く見ていたかもしれない。でも、そうでもなさそうだ。」

「忍野、戦場ヶ原は体重がない。」

母親の旧姓を呼ぶのは違和感があったけど、この際だ。

仕方ない。

「ふうん。そうだね。このことは君の方がよく『知っている』かもしれない。未来からの訪問者くん。」

と、忍野はとーさんから聞いたとおり、煙草に火をつけないまま、煙草を咥えた。

その後、僕は戦場ヶ原（つまりは、かーさん。ややこしいので、コレに統一）の家に向かうことに。

一通りの準備はしてくれるそうだが、僕がしなければならないらしい。

今いるのは、民倉荘というアパート。

お祖父ちゃんとかーさんが昔住んでいた所だとか。

現在、戦場ヶ原はシャワーを浴びている。

忍野曰く、『清める』ことが必要らしい。

本棚を見てみると、割と少ない。

夢野久作って、聞いたことないや。

坂口安吾は分かる。

桜の森の満開の下を書いた人だ。

「あら、桜の森の満開の下を知っているのかしら？」

桜の森の満開の下を手にとって読んでいると、戦場ヶ原の声がした。

素っ裸。

マッパである。

「う、うわっ！」

大袈裟に倒れてしまった。

「どいて。下着が取れないじゃない。」

「フツーはタオルとかで隠すものじゃねえのか？」

「嫌よ。そんな貧乏臭い真似」

ブラジャーとショーツは高そうなものだった。

拘りがあるのだろうか？
僕のみぞ知るセカイだ。
今のは語呂がよかったから、やってみただけさ。
「五人の詐欺師に騙されたのは言ったわよね？」
「ああ。聞いた。」
一人目は貝木、という人らしい。
だけど、初対面であるはずの僕が知っていていいはずがない。
だから、無知を決めることにした。
「ちょうど一人目。お父さんとお母さんが離婚したのは。」
協議離婚。
なんでも、母親が変な宗教に嵌ってしまったとか。
着替えながら、彼女は物憂げな感じで考えている。
何を考えているのかは知らない。
無表情だから。
それでも、過去を思い出そうとしているのかもしれない。

上に着ていたものをまた脱いで、箪笥から別のものを取り出した。
白いカーディガンと長めのスカート。
どうやら、それで行くらしい。
「行きましょうか、土砂降り君。」
「・・・もう、指摘する気が失せてきたよ・・・」
「私の美しさを？」
真顔で驚くな。
怖いわ。
「一つ聞いていいかしら？」
「なんだよ。」
「貴方と私、どこかで会った気がするんだけど、どうかしら？」
自分の息子であることに本能は気付いているのだろうか？
だとするなら、母は偉大だ。
「そんなことはねえよ。会ったことあるんなら、名前くらい覚えるだろ」

「それもそうね。」

と、クスクス笑った。

やはり、美人は笑うとかなり美しくなる。

マゾコン発言ですが、なにか？

失礼、噛みました。

## ひたぎクラブ０４（次）（前書き）

第四話です。
なんと、まさかの二日がかりで三話同時投稿。
新記録です！（パフパフパフ～～～～～）

## ひたぎクラブ０４（次）

民倉荘の外には、改造を施しまくった僕のマウンテンバイクがあった。

うむ、今日もカッコいい。

チェーンを外そうとカゴを見ると、紙があった。

『お前には大事なものなのじゃろう？自転車をここまで原形をとどめないほど、改造したのは許さないが、まさか自分の息子がタイムトラベルするとは思わなかったよ、と我があるじ様が言っておった。いずれ、迎えに行く。それまで、そこの世界で楽しむが良い。――心優しいヅッキーのお姉ちゃんより』

ヅ、ヅッキーって。

卯月ですら、ミッカーだというのに。

僕がやろうとしているのは、歴史の改変。

それは、下心があるわけではない。

偶然にも過去に飛ばされただけなのだ。

悪気は何もない。

「何をしているのかしら？私を待たすなんて、殺したわよ」

「過去形ですかっ！？」

僕は突っ込みつつ、改造しまくりのマウンテンバイクを彼女の前に押していく。

無論、手紙はポケットに突っ込んだままだ。

「そういえば、来る時はなかったわよね？マウンテンバイク・・・・っていうか、それ、本当に自転車なの！？」

マジで驚かれた。

いや、サイドミラーとか3段階加速装置（なんだよ、それは！）が付いてるけど、立派な自転車だよ。

分からない人は分からないものである。

なんてこったい。

「さーてと、行きますか。」

僕はサドルにまたがり、ペダルに足をかける。

「私にクッション代わりにカバンを渡すとか、しないのかしら？」

「しねえよ！まず、文房具で武装してた人にそう言われると、説得力とかねえし！・・・もういいよ。」

「え、あ、その。別に死んで欲しいって言ってないし・・・」

「死ぬつもりもねえよ！カバンひきたいなら、ひけばいいじゃないか！」

戦場ヶ原に僕はカバンを渡した。

彼女は満足そうにカバンをひく。

すると、「早く、行きましょうか」とだけ言った。

なんというか、この人は。

学生時代からこうだったのか。

変わらないというか。

僕はペダルを漕ぎ出した。

＊

学習塾跡までにはそんなに時間はかからなかった。

7分くらいだろうか。

先ほどと同じように、戦場ヶ原は僕のカバンの紐を引っ張りながら、僕は忍野の所まで案内した。

「やあ、来たね。待ちくたびれたよ」

「！？」

忍野は白い浄衣だった。
戦場ヶ原は無意識なのか、僕の掌に触れた。
だが、気付いたのか、すぐさま離した。
「つーか、なんでそんな格好なんだよ」
「一応、神様に会うんだ。これくらいしないとね。」
「忍野さんは神職なんですか？」
「いや？神社に勤めてるわけじゃないんだ。色々、思うところがあってね。」
忍野はスタスタ、歩き始めた。
「どこ行くんだよ？」
「決まってるじゃないか。神様を呼び出すところさ。」
忍野に案内された所は、なんというか厳かな場所だった。
「ここか・・・。」
「方法は『聞いてる』はずだよ、水浸し君」
肩にポン、と手を置かれた。
だから、水浸しじゃねえっての！

「ありゃ？忍野は？」

「どこかに行ったわよ。」

ケロリとした表情の戦場ヶ原さん。

さいですか・・・。

まあ、いいや。

「ていうか、忍野さんの言ってた儀式って何？」

「気にするな、問題ない。」

これぞ、ミカヅキ・ゴマカシ！

まあ、ごまかす所ではないんだけど。

「さて、ラクにして。」

ほとんど、聞いた話を思い出しつつ、降臨というのだろうか？

その司会進行を僕は進める。

「あんたの名前は？」

「戦場ヶ原ひたぎ。」

「好きな音楽は？」

「音楽はあまり嗜まないわ」

「人生の失敗は？」

「言いたくない」

半ば専門家のようなことをしているけど、これは全て聞いた事をしているだけ。

だから、カッコつかない。

「一番嫌なことは？」

戦場ヶ原が目をつぶったまま、呟く。

忍野の気配がする。

後ろで見ているのだろうか？

「お母さんが、悪い宗教に嵌ったこと」

ここで、僕が説明していないのであって、この場で言わせて貰おう。

戦場ヶ原の母親が悪徳宗教に嵌ったのは、戦場ヶ原が名前を言えば誰もが知っていそうな、病におかされたときのことである。

それは、小学生の頃らしい。

羽川も知らない、小学生の時。

奇跡的に、手術は成功した。
そして、どこかで主客転倒したとか。
「それで？」
「ある日、幹部が私の家に来て・・・」
「私を・・・、犯そうとしたわ」
「そっか。で、そのとき、お母さんはどうしたんだ？」
「ただ、見ていただけ。」
僕は続ける。
聞いたままを。
「で、どうしたんだ？」
「近くにあったスパイクで、殴ってやったわ」
「すげえな・・・」
「その後、怒られた・・・。そして・・・、」
これも事実だ。
かーさんは、陸上部だったのだ。

部屋の中にスパイクがあってもおかしくない。

「あのとき、私が抵抗しなければ・・・、お母さんは・・・」

涙を流し始めた戦場ヶ原。

僕は居ても立っても居られなかった。

「でもよ、嫌なヤローとそんなことしたって意味ねえ。あまったらんじゃねえよ。嫌なことは嫌。
正しいことをしたんじゃねえか。胸張ってろよ。少しずつでいい。
目を開けてみ？」

ここまで乱暴な口調じゃなかった気がするが、まあ、いいや。

「み、見える・・・」

「何が見えんだよ？」

「蟹・・・！」

戦場ヶ原――つまり、僕のかーさんは学生時代、二年以上、怪異に悩まされていた。

それが、蟹。

重いし神。

おもし蟹である。

「っっ！」

戦場ヶ原は思い余って、顔を上げてしまった。

そのとき、壁に叩きつけられたのである。

「水浸しくん！」

若干ながらも、月の光が差し込んでいる。

その方向を忍野は僕に教えてくれた。

月を浴びて、化物を吸い取るで『吸化月（きゅうけつき）』。

実質は狼男に近いらしい。

それでも、僕は四分の一だけ吸血鬼。

ただの吸血鬼ではない。

怪異殺し、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの二人しか居ない、眷族の最後の一人の眷属の子だ。

イコール、優秀種である。

月の光を浴びて、八重歯が伸びる。

爪が伸びる。

僕は戦場ヶ原を押さえつけている、蟹をはぎとり、地面に叩きつける。

これも、『本当の史実』では忍野がしていたことだ。

「このまま、潰してもいいんだけど、どうする？お嬢ちゃん」

さっきまで、見ていただけの忍野が歩いてきた。

いや、正しくは『見守っていた』と言うべきか。

「ちゃんと出来ます。ちゃんと、やりますから」

「そうかい？じゃ、水浸しくん」

「了解」

僕は少し力を緩める。

「もう大丈夫です。だから、お願いです。私にお母さんを・・・お母さんを返してください」

シュッ

僕が押さえつけていた、なにかは消えた。

「三ヶ月くん」

戦場ヶ原に名前で呼ばれた。

いくら、母親の若い頃とはいえ、外見はかなりの綺麗どころ。
名前で呼ばれるのは、かなり照れるものがある。
「色々、迷惑をかけてしまったけれど、私と仲良くしてくれると嬉しいです」
僕は頷いた。
どうやら、僕の母親は若い頃からツンデレだったんだな、と改めて思い知らされた。
後日談ていうか、今回のオチ（オチってどんな意味なんだろう・・・）
どうやら、僕のこの過去の世界での家は民倉荘の戦場ヶ原の隣の空き部屋らしい。
「隣同士ね。嫌な縁を感じるわ」
と、毒舌を飛ばしてくれた。
蟹を食べる件はなかった。
しかし、僕にとってはどうしてもしていただきたいことがある。
父・阿良々木暦と付き合っていただくことである。
そうでもしないと、僕が生まれなくなってしまうからだ。

ドラえもんだったか、ルートは変わってもその人物は生まれるらしい。

だけど、僕は阿良々木暦と阿良々木ひたぎの子供でよかったとおもう。

自分勝手なお願いかもしれない。

自分のせいで捻じ曲げた運命ならば、自分で捻じ曲げてやらなければ。

少し、ちょっかいだしつつの、だけど。

## ひたぎクラブ０４（次）（後書き）

三ヶ月「スラマッパギ！豪雨降（ごううふらし）なんていう、変な苗字で過去世界を生き抜くことになってしまった、阿良々木三ヶ月です！」
暦「ス、スラマッパギ？なんじゃそりゃ？どうも。この滅茶苦茶にされそうな過去世界では、まだ戦場ヶ原に出会ってすら居ない、阿良々木暦です」
三ヶ月「とーさん、出番なかったね！」
暦「お前が取ったんだろうが！？全く、どーしてくれるんだよ・・・。メタ発言するし・・・」
三ヶ月「後書きでは、主に僕と他諸々な方々と雑談をしたいと思います！」
暦「聞いてねえ・・・」
三ヶ月「この僕、三ヶ月少年は事件を解決することができるのか！？」
暦「いつから、お前は名探偵の孫になったんだ！？」
三ヶ月「じっちゃんの名にかけて！」
暦「だから、やめろ！」
三ヶ月「ロリコンオヤジの名にかけて！」
暦「誰がロリコンだ！誰がオヤジだ！」
三ヶ月・暦「次回、みかづきクリエイト（次）０１！」
三ヶ月「果たして、三ヶ月少年は・・・」
暦「いい加減にしろ。三ヶ月は、運命を捻じ曲げてしまったが、なんとか元に戻せるだろうか！？」
三ヶ月・暦「お楽しみに！」

後書き（マジな方）
今回は、三ヶ月・暦親子に次回予告させました。
運命を滅茶苦茶にしてしまったが、なんとか三ヶ月は元の軌道に乗

らせることができたようです。
次回をお楽しみに！（二度目）

## みかづきクリエイト０１（前書き）

第五話です！

## みかづきクリエイト01

このままいけば、僕は『アララギ・ミカヅキ』ではなくなる。

そんな気がした。

あの一件の後、僕は『三ヶ月くん』と呼ばれている。

迫る、運命の母の日。

それで僕が生まれるか生まれないかが決まってしまう。

一体全体、何が起こっているのだろう。

なんで、過去に飛ばされたのだろう？

忍野のところに行ってみた。

「やあ、来たね。待ちくたびれたよ」

「・・・そう言って、そんなに待ってないように見えるのは僕の気のせい？」

「そうなんじゃないかな？」

忍野メメはいつものように、机を縛って作ったベッドの上にいた。

そこまで忙しくないようで、さきほどまで眠っていたのだろうか？

寝癖が酷い。

辺りに散らばる少年漫画の数々。

それは、春休みに父さんが羽川さんに買わせたものばかりだった。

「・・・それで、何を聞きに来たのかな？」

「なんで、僕はこの時代に飛ばされたんだ？」

「そんなことは分からないなあ。・・・それだけじゃないだろう？君が聞きたいのは」

見透かしたかのような口調。

聞いたとおりだ。

聞いた話では、父さんの後輩に狼人間となり、彼の助手となったのがいるという。

名前は・・・忘れたけど。

「ああ。僕は、このまま無事に歴史に存在することができるのか？」

「ん？ああ、君が誕生するかどうかか。そうだね、このままだと難しいかな？」

「・・・そうだろうな。」

「水浸しくんらしくないね。阿良々木くんなら、食いかかってくる

けど、君は違うね。」

忍野は目を細めて僕を見る。

どういう意味だろうか？

「どういう意味だよ？」

「まあ、気にしないでくれ。そうだね、なんとか辻褄が合うようにする方法はあるよ」

「どんな？」

「これだ。」

それは、変な形をした矛だった。

矛というより、棒だろうか？

少し小さめの。

「これは？」

「矛盾だよ。」

「そのまんまじゃねえか・・・」

「これは、二回しか使えない。」

「二回だけ？」

「そう、二回だけ。方法はいずれ見つかるだろう。それだけだよ。」

「・・・で、料金はいくら？」

「これはサービスだ。タダだよ」

そう言って忍野は眠ってしまった。

二度寝だろう。

それにしても、忍野。

寝顔が凄いことになってるぞ・・・・。

表現は何つーか、できないけど。

その帰りのことだ。

説明を受けていないことに気付いて、テキトーに弄ってみる。

「矛盾」にカウンターが現れた。

残りは一回。

少し、次元が歪んだ気がした。

それなら、それで構わない。

正しい歴史が刻まれるなら。

「あの、すいません」

後ろから聞こえる声。

振り向くと、雪のように白い肌をした黒いセーラー服を着た、黒髪ストレートの少女。

身長は頭一つ分といったところだろうか。

僕との差は。

それにしても、スタイルいいな。

「頭に変な寝癖が付いてますよ？」

## みかづきクリエイト０１（後書き）

コメントをください。

お願いしますｏｒｚ

## みかづきクリエイト０２（前書き）

初めて、文章評価されました！
ありがとうございます（涙）
さて、今回は三ヶ月が恐れ多くも羽衣狐に「呼びづらいから」というだけで変な名前を付けてしまいます。

## みかづきクリエイト02

「いや、コレ地毛だから！」

「？地毛なんですか？」

彼女が指すその先には、僕の頭に聳え立つ、はてなマークのアホ毛。

アニメでは主人公（とーさん）の感情表現の現れで、原作にはないらしい。

ちなみに、何故か卯月にはアホ毛がない。

兄妹だってのに・・・。

「うん、地毛だ、地毛」

すると、彼女は背を伸ばしてアホ毛に触れる。

「なにすんだよ！」

「あー、疲れた。早く取らぬのか？その飾り」

「飾りじゃねえわ！地毛だ！地毛！ていうか、知り合いと物凄く話し方かぶってるんですけど！」

突っ込むしかない。

突っ込まずにどうしたものか。

明らかにねーちゃんと被ってる。

いいのか、被で・・・。

入ってるシリーズ名が「被物語」だけど・・・。

「そうだ、私の側近にならないか？」

口調が変わっていることに僕は突っ込まなかった。

ていうか、突っ込む必要はなかったな。

そして、爆弾発言聞いたぞ！？

「待て。突然すぎて何がなんだか・・・」

「だから、パシリになれと」

「側近から大分ランク下がっただと！？」

そのとき、黒セーラーの彼女は髪を掻きあげる。

吸血鬼で言う所の異性を「魅了」、と言う奴だろうか？

「なにしてんの？」

「え？私の魅了が効かないのか？お前は」

彼女は真顔で動きが止まった。

真顔でビックリするない。

怖い。

「ひょっとして、お前はキスショット・アセソラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属の子？」

「そうだが、アセソラオリオンじゃないぞ。アセロラオリオンだとおもう。名前の意味は知らないけど。」

「そうか。なら、都合がよかった。私は羽衣狐（はごろもきつね）。名はなんと言う？召使い」

「いや、まだお前に仕えるなんて一言も言ってねえよ！？・・・つーか、言いたくねーなー。」

「早く言え。私を待たせるな」

そういうと、彼女はスタスタ歩いて浪白公園へ。

何してるんだろう、と考えていたら夕日が突然、現れた。

時計を見てみると、まだ午後二時。

暗くなるにはまだ早い。

春だし。

「なあ、お前。怪異？」

思い切って、浪白公園に向かって走り、彼女の向かいに立つ。

「怪異？ああ、魑魅魍魎のことか。いかにも。・・・で、お前の名前は？」

まだ聞くか・・・。

諦めの悪いやつめ。

卯月か、お前は。

「阿良々木三ヶ月（アララギ ミカヅキ）。何故か、一方通行（アクセラレータ）に似ているのに、よく父親に似ているといわれる、ヴァンパイア・クォーターだよ」

## みかづきクリエイト０２（後書き）

第六話です！
全体的には

## みかづきクリエイト０３（前書き）

第三話です。
全体的には七話目！

## みかづきクリエイト03

名乗り終えた後、僕は考える。

彼女がこの時代の忍野メメに封じられる可能性を。

忍野メメ。

妖怪変化の専門家。

怪異のオーソリティ。

怪異と人間の間を繋ぐ、バランサー。

何故だろう。

僕の中に自然と、彼女、羽衣狐を護りたいと思えるようになった。

これは、暗示？

これは、洗脳？

たぶん、違うとおもう。

「ミカヅキか・・・。字はどう書くんだ？」

「三ヶ月でミカヅキ。」

地面にその辺に落ちてた、棒で書いてみる。

『阿良々木　三ヶ月』と。

「ふうん。ミカヅキか・・・・。綺麗な名前だな。中身は醜いくせに」

「ちょ！？なにすんだよ！」

彼女は僕の制服の肩の部分を引き剥がした。

ちょうど、左肩。

そこは、髑髏が釘を生やしている、刺青のような永遠に消えることのない痣があるところだ。

彼女が『阿』、『良』、『々（おなじ）』、『木』、『三』、『ヶ』を消して、何故か月だけ残した。

「僕の袖を剥ぎ取っておいて、どうする気なんだ！」

「！？」

そのとき、僕は動けなくなってしまった。

羽衣狐は妖艶な目になり、僕の左肩の痣を優しく撫でる。

漫画では、強力な妖怪に呪いとかの古傷を触られると痛むものだけど、不思議と痛まなかった。

これもまた、彼女の妖力だからできる所業なのだろうか？

一種の衝動が湧き上がる。

羽衣狐ハ僕ノ主人。

ハゴロモキツネハボクノシュジン。

ダレニモワタサナイ。

変な感覚だ。

何かを流し込まれるような、そんな感覚。

彼女が何故か僕の痣を愛しそうに撫でている中、僕は気を逸らそうと思い、空を見上げる。

見ると、月が出ていた。

腕時計を見ると、午前2時。

逢魔が時、と言う奴である。

述べたとおり、僕は変な体質だ。

月の出る夜には、必ずと言っていいほど化物になってしまう。

小さい時の思い出はあまりいいものはなかったな。

一人ぼっちだったし。

でも、不思議と寂しくない。

さきほどまで、あんなに嫌だった彼女がいるから。

今、化け物と言う変化を遂げているところだけど、全然苦しくない。

僕は両手を見る。

鋭く尖った爪。

口の辺りに手を当ててみると、八重歯があった。

しかも、かなり尖っている。

変化が終わった後、羽衣狐はいなかった。

「あれ？アイツは・・・？」

「此処」

振り返ると、彼女は僕の背中に抱きついていた。

それが無意識にとても、嬉しかった。

何故かは分からない。

だけど、彼女の言葉が決定的だった。

「お前が危険なのならば、これからは私が護ろう。だが、月詠（ツクヨミ）、お前は私だけを護れ。私だけを見ろ。」

## みかづきクリエイト０３（後書き）

三ヶ月が変化してしまいました！

## みかづきクリエイト０４

「わらわは、お前をこのようにしておもっているが、お前はどう思う？我が側近にして、愛おしい妖魔よ」

羽衣狐は、優しげな瞳で僕を見つめる。

そうだった。

何も言葉を話していなかった。

ヤバイやバイ。

「最初は、変な奴かな？とは思ってたけど、そこまで好きなら仕方ないよ。なんで、この時代に飛ばされたかは知らないけど、はーちゃんに出会えてよかったとは思うよ？」

そういって笑ってみせる。

何故か、羽衣狐は気まずそうな顔をした。

「・・・実は、この時代に飛ばしたのはわらわじゃ。」

「・・・え？」

えっと、何を言ってるんだ？

ち・・・がうよな？

「わらわは、再び鵺、つまり、お前達で言う安倍清明を再び生ませたい。わらわの為に死んだ、優しき清明を。だから、お前のような強い存在が欲しかった。お前のような側近が欲しかった。だから、この街にお前の気配を察した時は嬉しかったよ。ようやく、強い存在に巡りあえたと。帰りたいなら、帰っても構わない。」

少し泣きそうな顔だった。

玉藻前。

九尾の狐。

羽衣狐。

どちらかというと、人間にとっては凶悪な存在だ。

でも、目の前の彼女は非力な少女にしか見えない。

・・・もっとも、正体は強力な妖力を持っているんだけれど。

別にいいや。

『帰る方法』が傍にいるし、連れ帰るもの悪くはない。

守るべきご主人様であるのだから。

「帰ろう、衣羽(いはね)ききねちゃん。」

「衣羽(いはね)ききね？」

「あんたの手下の分際で悪いけど、人間の姿の名前だよ。羽衣狐、なんて名乗れないだろ？」

羽衣狐――――きくねちゃんは、暫く考える。

そして、答えに至った。

「分かった。自分の身分が分かって、さらにはわらわに良い名前を与えてくれる。わらわは良い側近を持った。褒めて遣わすぞ、月読（つくよみ）」

と、嬉しそうに賛同してくれた。

## みかづきクリエイト０５（前書き）

第五話です！
かいてておもったんですが、三ヶ月が羨ましくて仕方ないです。^^；

## みかづきクリエイト05

「・・・で、どうする？」

我が主人である、羽衣狐―――衣羽（いはね）きくねは僕に聞いた。

僕に聞かれても困る。

つーか、この姿はどうにかならないだろうか。

悪魔のような角。

悪魔のような翼。

悪魔のような鉤爪。

そして、真っ赤な目。

・・・いや、これは仕方ないよな。

生まれつきだし。

整形手術すれば治るかもしれないけど、そこまでする必要はない。

「月読？なんか言えよ。」

きくねが僕の顔を覗き込む。

しかも、かなり顔が近い。

間近で見ると、ここまで可愛かったんだな・・・。

うーむ。

怪異とはいえ、可愛すぎるじゃないか。

「そうだな、元の姿に戻してくれない？もう一回、タイムトラベルして僕の時代に戻るんなら、この姿はまずいだろうし」

「・・・・・・・・・・」

露骨に嫌そうな顔のきくね。

気に入っているのだろうか、僕のこの姿が。

僕としては、さっさと人間の姿に戻りたい。

「・・・戻っても、逃げないか？わらわから。」

「逃げねえよ」

すると、きくねは僕に抱きついてきた。

無言で。

「きくね？」

何も反応がない。

どんどん、きつく抱きついて来る。
時間を見てみると、午前3時。
あれから、一時間経ったようだ。
もう少しで日の出。
元に戻らないと、死んでしまう。
まあ、夢魔だし。
インキュバスだし。
「まあ、良い。早く戻るがいい、わらわの愛おしい妖魔よ」
彼女が僕のファンキーな髑髏の頭から釘が生えている、奇妙な痣のようなタトゥーのようなよく分からないものをその真っ白な指で撫でると、僕の中に「インキュバス」は戻っていった。
元の人間の姿である。
「さて、帰ろうか」
「そうだな。・・・火車！」
彼女がそう呼ぶと、火を纏った猫が火を纏った車輪を持つ、車を引いて現れた。
どうやら、これで帰るようだ。

## みかづきクリエイト０６（前書き）

コメント、どうもありがとうございます！

## みかづきクリエイト06

変な感覚だ。

四肢に火を纏った猫が引く、四輪に火を纏う車に乗るのは。

すごい、複雑な気分だ。

中から誰かが降りてきた。

蛇を思わせる目をした少女に見える。

「おねえさまー、お迎えに来ましたー」

きくねとたぶん、この少女は姉妹ではないだろう。

こんなのを見たことがある。

ああ、そういえば某風紀委員（ジャッジメント）か。

今、ブームなのだろうか。

そういうのが。

「ああ。来るとは思っていたぞ、狂骨。」

きくねは妖艶に笑う。

僕に寄り添いながら。

狂骨は忌々しいものを見る目つきで僕を見た。

「誰ですか、こいつは。」

すると、きくねはニコリとわらって僕の手ときくねの指を絡ませた。

恋人繋ぎという奴である。

「こいつは、わらわの新しく妖魔となった月読(ツクヨミ)だ。」

「なあ、月読(ツクヨミ)って、どんな意味だ？」

「コイツ！おねえさまになんて口を！」

怒る狂骨と対照的にきくねは冷静だ。

「それくらい、いいだろう？『月夜の君』。そういう意味だ」

月夜の君。

つまり、『月夜の貴方』と言う意味ではないだろうか。

僕の少ない語彙では分からないケド。

正しくは、浅学菲才と言うべきかな。

正しくは浅学非才。

ミスして御免なさい。

「『月夜の君』、か・・・」

君って意味には、二人称のほかに陛下とかそんな意味があった気がする。

わかんないけど。

「ほら、早く帰りたいのだろう？『月夜の君』」

ニコリとわらって、きくねは僕に手を差し出す。

狂骨が拗ねているが、それは無視。

相手にすると、面倒だし。

さて、帰るとしよう。

＊

その後、火車に乗り込むと何秒経つか経たないうちに元の時代に戻った。

酔ったのは言うまでもない。

後日談、というか今回のオチ。

やっぱり、戻れなかった。

さて、過去の世界を楽しむとしよう

## みかづきクリエイト０６（後書き）

三ヶ月「みかづきクリエイト、終了！」
きくね「うん、終わったな。月読、どこかに旅行しに行かないか？」
三ヶ月「別にいいけど、たぶん夏休みになるな。」
狂骨「こらー！お姉さまから離れなさい！」
きくね「いいじゃないか。わらわの側近だし（腕を絡ませて）」
狂骨「うう・・・」
三ヶ月「え、えっと！（あわわ）次回、『するがモンキー（次）』！」
きくね「月読、どこに行く？」
三ヶ月「夏休みになったらなー」
狂骨「早く離れなさいってば！」

## 余談（前書き）

三ヶ月「つーことで、しばしの休息時間的な意味で」
きくね「どういう意味なんだ？余談って」
狂骨「余談って言うのは、別にいう必要のないことなんです。」
三ヶ月「へー、そういう意味か。」
きくね「月読はなんでも知ってるんじゃのう♪」
狂骨「説明したのは私だというのに！？」

## 余談

阿良々木三ヶ月（修羅月の夜の君）
月を浴びて、夢魔に真名を付けられた少年。
阿良々木暦と阿良々木ひたぎの長男に当たる。
はてなマークの奇抜なアホ毛と真っ赤な目が特徴。
父親が伝説の吸血鬼、元・キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードこと忍野忍の元・眷属であった影響なのか、目が紅く、物質創造スキルを受け継いでいる。
左肩には釘が髑髏を貫いた、奇妙な痣が存在する。
これは、ゴールデンウィークに出くわした『ある事件』によってついたもの。
月夜にはいくら、重傷を受けても死ぬことはない。（伝説の吸血鬼の血と夢魔の力が作用するため。）
このため、月を浴びるとデビルマンのような姿に変貌する。
色々と謎が多い。
モチーフは某学園都市最強の一方通行（アクセラレータ）。
身長は１７３ｃｍ

衣羽きくね
魑魅魍魎の主。
三ヶ月と付き合っており、二人きりの時は『わらわの愛おしい妖魔』と呼ぶ。
その正体は羽衣狐。
容姿は原作のぬらりひょんの孫の現代の羽衣狐。
だが、かなりの頻度で惚気る。
肌が真っ白で黒髪ストレートで主にセーラー服を着用。
身長は１６２ｃｍ。スタイルはかなり良い。

東雲恭子（しののめきょうこ）＝狂骨
きくねの手下に当たる。
蛇のような目をしており、きくねといちゃつく三ヶ月を敬遠している。
主に和服を着用している。
三ヶ月に『東雲恭子』なる名前を付けられるが、気に入っていない。
ある事件で三ヶ月に特別な思いを抱き始めることに。
身長は１２３ｃｍ。

『月読』
主にきくねが三ヶ月を呼ぶときに使用する呼称。
その意味は『修羅月夜の君』を略したもの。
元ネタは日本神話の月詠（ツクヨミ）。

# するがモンキー（次）０１（前書き）

１２話目です

## するがモンキー（次）０１

僕はこの前、変な体験をした。

タイムトラベルが小説のテーマの主流となったといってもおかしくない、この時代に僕はタイムマシン無しでタイムトラベルを果たしてしまった。

ちょうど、ゴールデンウィーク。

僕は夢魔に真名を与えられた。

修羅月夜の君。

それが、僕に与えられてしまった名前である。

どういうわけか、お付き合いをすることになった衣羽きくね（＝羽衣狐）には月読（ツクヨミ）と呼ばれているが。

理由はどうだかは知らない。

その夢魔が言っていたのだが、『真名を知られることは地獄』らしい。

まあ、個人情報を頑なに漏らそうとしない時代だ。

怪異もそうなのだろうか。

そうだとするなら、なんと人間臭いのだろう。

とまあ、雑談はおいといて。

神原駿河は僕にとって特別な存在である。

恋人的な意味ではなく、親戚のおばさんのような存在だ。

違った。

近所のおばさんのような存在だ。

毎朝、早朝にランニングしてるためか、四十を過ぎてもそのスタイルはキープされていると言う（変態と言う名の紳士ではない、父談）。

だが、一つ忘れてはならないことがある。

母の影響を学生時代、受けすぎて『するがのおねーちゃん』は変態なのである。

そのため、週に何回も父さんはメールをしている。

妻とのメール回数は１０回。

息子の数えられて、どうするんだ・・・。

## するがモンキー（次）０２（前書き）

基本的に、タイムトラベルの繰り返し、と言った形になります。
読者の方が理解してくれるか、心配で溜まりません

## するがモンキー（次）０２

「早く起きなさい、月夜。」

誰かが起こそうとする声がする。

声からして、少女。

卯月はこんな声を出せない。

もはや、声ですら妖艶美女なのだ。

外見と違わず。

それで、駿河のおねーちゃんはなんか抱きつこうとしたことか。

モロタイプ、だそうである。

だが、そんな卯月がブラコンな理由は知らない。

人はいろいろ、あるのだ。

「後、５分って・・・。恭子！？」

僕は二次元キャラお決まりのセリフを言おうと目を少し開けると、

そこには卯月ではなく東雲恭子が居た。

「恭子？変な名前つけないでください。私は狂骨ですっ！」

頑なに認めようとしない。

そりゃ、そうか。

『怪異として』の存在が変わるらしいし。

頑なにおねーちゃんが『忍さん』と呼ばれるのを嫌う理由が分かる。

父さんに許可している理由は、たぶん『愛人』だから。

「・・・起きたか、月読。」

嬉しそうに笑いかけてくるのは、僕の主人にして彼女、羽衣狐の衣羽きくねである。

どういうわけか、頑なに名前で呼ぼうとしない。

・・・まあ、付き合って一週間も経ってないしな。

あれから、タイムトラベルに何故か失敗してしまった。

僕の見解では、まだ僕はこの２３年前の世界で、やらなきゃいけないことがあるようだ。

八九寺ちゃんのこともなにもしてない。

とりあえず、母さんと父さんが付き合ってくれるよう、僕は矛盾を民倉荘の部屋で使った。

電話帳に3人登録されている。

この世界の母さん（戦場ヶ原ひたぎ）と父さん（阿良々木暦）と羽川（羽川さん）が登録されている。

幸い、２３年後の３人は登録名が違うので幸いだった。

一通、メールが届いていた。

とーさんからである。

『よぉ、ミカヅキ。２３年前の世界は楽しいか？そのときは、お前のママは変わってないだろう？羽川は相変わらず、良い奴か？ソイツ、着やせするタイプだから惚れないように気をつけろ。惚れたら僕が許さない。僕の見解では、お前はもしかすると、僕が経験してきた全ての出来事に巻き込まれるんじゃないか、と思う。お前のふざけたバイクみたいなマウンテンバイクを何故か送れた原因は分からないケド、お前の形態は凄いな。未来とメールできるのか。まぁ、いいや。Ｐ，Ｓ．忍が迎えに行くとか行ってたけど、無理そうだ。なんとか帰って来い　パパより』

なんて、長いメールなんだ・・・。

さて、学校の用意でもするか。

# するがモンキー（次）０３（前書き）

## するがモンキー（次）０３

学校に向かって、自転車を走らせると、阿良々木（父さん）と戦場ヶ原（母さん）が居た。

矛盾の効果はあったようだ。

少し、ほっとすると戦場ヶ原に気付かれた。

「何ため息をついているのかしら？黒いセーラー服の子といちゃついてた、サンカゲツくん。」

「なんだか聞き捨てならないことを聞いたけど、戦場ヶ原、コイツのこと知ってるのか？」

「ええ、知ってるわ。貴方の頭では覚えてないでしょうね。彼は私のあの一件で『祝言』を忍野さんの代わりに述べた、豪雨降（ゴウウフラシ）サンカゲツくんよ」

戦場ヶ原と阿良々木の真ん中の後ろらへんと言う、なんだか説明しづらい位置に居た僕はそのように紹介された。

「ああ、そういえば居たな。」

どうやら、阿良々木は思い出したらしい。

矛盾が捻じ曲げたこの歴史では、『豪雨降は阿良々木暦とともに、戦場ヶ原ひたぎを怪異側から戻る手伝いをした』という歴史になっているらしい。

でも、いずれ忘れられるに決まっている。

その方がいい。

ただでさえ、過去に介入してしまっているのだ（どこかの誰かさんのせいで）。

「なんで知ってるんだ！？覚えてもらえて光栄だけど、正しくはミカヅキだよ。」

「そうだったわね。なんで、突っ込み方が阿良々木くんと似ているのかは謎だけど。ちなみに阿良々木くん、彼は民倉荘の私の部屋の隣の部屋よ」

「え？そうなのか？」

「え、うん、まあ」

曖昧な返事になってしまった・・・。

僕の予想が正しければ、今日は駿河のおねーちゃんと父さんが母さんをめぐって、戦う日の筈。

こんな重要な日に僕は何をするべきなのだろうか？

「何を考えているのかしら、ミカヅキくん」

あ、カタカナ表記になった。

面倒なのかな・・・。

「教えないと、頬をつつくわよ」

マジで突き始めた。

僕の両方の頬を高速で。

阿良々木は顔が蒼くなっている。

こんな様子を見たことがないためだろうか。

彼は僕に耳打ちをしてきた。

「なにかあったのか？」

「しらねえよ。自分で聞けばいい」

「出来るかよ！こんな嬉しそうな戦場ヶ原、僕を虐めてる時にしか見れないよ！」

そんなことを言われても、正直困る。

僕だって色々あるのだ。

そもそも、付き合ってもなんでもない女の子の様子の変化なんて、妹ならまだしも分からない。

・・・あ、彼女居たわ。

そういえば。

運命の放課後まで、あと何時間・・・

＊

そして、放課後。

僕は忍野のいる廃墟に来ていた。

「へえ、思ったより早いじゃないか。ときわたりくん」

「どこぞの幻のポケモンのように言うな。水浸しくん、じゃなかったのか」

「ああ、アレね。飽きちゃった」

ほう、言ってくれるじゃないか・・・。

忍野メメは、いつものように片膝を立てて学習机の上に座っていた。

彼はいつもの見透かしたような視線をこちらに浴びせてくる。

「そういえば、ときわたりくん。」

「なんだよ。」

「昨日、黒いセーラー服の子と歩いてなかった？」

きくねのことを知ってるのだろうか？

専門家だし、退治するかもしれない。
いや、あくまでも彼は『バランス』をとる為だと言うのだろうけど。
「それがどうかしたのか？」
「それなら言っておかなきゃいけないと思ってさ。彼女は危険だ」
「どうしてそういい切れるんだ？」
「羽衣狐は、『人間の皮を羽織る狐』という意味から来ている。阿良々木くんの息子である、ときわたりくんに言っておかないといけないと思ってね」
浮かんでくるのは、きくねの笑顔。
僕が彼女に仕える、と言った時の笑みは今でも忘れない。
「・・・ふうん。なるほど」
今の思考を読み取ったのだろうか。
「ときわたりくん。下の教室に行っててくれないかな？後で呼ぶよ」
「・・・あ、ああ」
言われたとおりに下の教室に向かって、きくねや恭子に思いを馳せて一時間。

上のほうで戦闘だと思われる、騒音が聞こえてきた。

## するがモンキー（次）０３（後書き）

次回でミカヅキが若き日の両親に正体を暴露します！

## するがモンキー（次）０４

音がした方向に向かって、僕は走って言った。

ガラスがはまってすらない、窓を見ると、もう既に夜だった。

月もちゃんと出ている。

僕の姿が変貌していく・・・筈だと言うのに、僕の姿は大して変わらなかった。

鋭く尖った爪。

鋭く伸びた牙。

真っ黒な鴉のような悪魔の翼は、――――――生えていなかった。

どうしてかは知らない。

だけど、悪魔のような形の尻尾だけは生えていた。

泣き虫の悪魔相手（レイニー・デヴィル）にこれで戦えと言うのか、運命さんよ？

まあ、やってやる！

父さんのために。

母さんのために。

僕は力強く、音がした教室の扉を開ける。

「ミカヅキ！？」

父さんが泣き虫の悪魔と化した――いや、トランス状態の駿河のおねーちゃんの攻撃をかわしながら、僕を見て驚いた。

レインコートの奥に光る、二つの目。

その左腕は、猿のそれだった。

僕の顔に父さんの面影を見たのか、泣き虫の悪魔は僕に蹴りかかってくる。

伝承通りの長靴ではなく、スニーカー。

僕の頬にヒットする。

僕はそれでも、レイニー・デヴィルへと殴りかかる。

だが、相手は体育会系。

運動部。

体力的には勝つことが出来ない。

父さんに異様なまでに似ている僕は、父さんに代わり殴られ続けている。

吸血鬼の治癒力のおかげで、なんとか回復してはいるけど、いつま

で持つか・・・。

「い、いい加減にしろよ！」

押さえつけられていた、左腕を駿河のおねーちゃんの頬にかます。

拘束が緩んできた所で、僕は形勢を立て直す。

「殴るなら、僕を殴れ。殺すなら、僕を殺せよ！僕は、あんたが嫌いじゃない！この時点、この時代でのあんたは僕を知らないに決まっているけど、僕はあんたが嫌いなわけじゃないんだ」

そのとき、一瞬だけ彼女は元に戻った。

「頼む、阿良々木先輩・・・。この左腕を切り捨ててくれ！」

どうやら、彼女は僕と父さんを見間違えているようだ。

全くもう。

いつの時代でも、可愛い。

「誰が切り捨てるか！誰かと付き合ったとき、手をつなげなかったらどうするんだ！僕は責任を取らないぞ！」

そのとき、駿河のおねーちゃんは元の泣き虫の悪魔に戻った。

「憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎いにくい憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い・・・お前が、

憎い」

僕は彼女に全力で殴られた。

変な啖呵切ったせいだからだろうな。

我ながら、カッコ悪い。

飛ばされた場所は、父さんが倒れている場所から少しはなれたところだった。

「お前、お前は何者なんだ！？」

「い、今はいいだろ・・・。また説明するからよ」

レイニー・デヴィル、泣き虫の悪魔が父さんと僕に近づいてくる。

阿良々木暦と『阿良々木暦に似ている』僕を殺すために、歩いてきているのだ。

月の明かりが、この階にも差し込んでいる。

なんで、なんで、いつものように変化しないんだよ！？

死にたくない。

死にたくないッ！

僕は、レイニー・デヴィルを壁にめり込むほど、殴り飛ばしていた。

父さんは唖然としている。

息子とかそんなのを認める依然に、こんなバケモノを認めたくねえよな・・・。

背中に何かが生えている感覚がある。

下に見えるのは、学習机とか椅子。

僕はどうやら、飛んでいるらしい。

「もう、いいわ、ミカヅキ」

声がした。

戦場ヶ原もとい、母さんである。

「忍野さんから聞いたけど、貴方、私と阿良々木くんとの子供なんだってね。なんで、私に話さないのかと思って、怒ってたら、自分で罰しているじゃない。父親に似て、偉い子ね」

母さんは、動きやすいそうなラフな服装だった。

だけど、その目は鉄仮面を思わせる無表情。

そして、翼をせわしなく羽ばたかせている僕と父さんの前に立って、駿河のおねーちゃんとの間に立った。

「残念だけど、彼を殺しては駄目よ。そんなことをしたら、私が貴方を殺すわ」

母さんは少しずつ、駿河のおねーちゃんと距離を詰めていく。

「それとね、２３年後から私の息子が来てるのよ。ごめんなさいね、あまりにも阿良々木くんに似てるものだから、最初は驚いてしまったけれど、なんだか不思議なことに妙に愛着がわいちゃってるのよ。前置きはこれくらいにして、・・・待たせたわね、神原」

そのあと、レイニー・デヴィル――――元に戻った、駿河のおねーちゃんは泣き出した。

父さんがなんかいいたさそうな顔してたけど、ま、いっか。

後日談。というか、今回のオチ。

朝、少し騒がしい恭子やきくねをかわして外に出ると、駿河のおねーちゃんが居た。

「やあ、ミカヅキくん」

「あ、先輩とか、そんな呼び方止めたんだ。」

「まあな。時系列的には、お前は年下だしな。今から、阿良々木先輩の所に行こうと思うのだが、ミカヅキも来ないか？」

「・・・それ、学校では止めてくれよな・・・」

「さて、行くか！」

「絶対、聞いてないよな、さっきの！」

こうして、駿河のおねーちゃんはこの日より、父さんのパシリとなった訳である。

## するがモンキー（次）０４（後書き）

サンカゲツ「はい、するがモンキー（次）終了しました！」
ひたぎ「あら、サンカゲツくんじゃない。・・・彼に似て騒がしいわね、殺したわよ」
サンカゲツ「実の息子の名前を間違えるか！？わっ！サンカゲツになってるし！ていうか、僕、もう死んでるの！？」
サンカゲツ・ひたぎ「次回、かれんインパクト！」
ひたぎ「それにしても、このアホ毛、切っていいかしら？」
三ヶ月「切らないで！それ、結構大事だから！」

## かれんインパクト01（前書き）

気分が乗って、眠れないので次のお話を掲載します！

## かれんインパクト01

どういうわけだか、現在、阿良々木月火こと、２３年後で言う『月火おねーちゃん』が自宅に居る。

すごく仲良く恭子や、きくねと仲良く遊んでるのが謎で仕方ない。

話は一時間前にさかのぼる。

ちょうど、僕が洗濯物をたたんでいた時だった（当然、きくねの下着も洗濯していた。つーか、着替えどこから取ってきたんだよ）。

「はい。今出ます」

覗き穴（名称は知らない）を覗くと、月火おねーちゃんが覗き穴を覗き込んでいた。

ぴょこぴょこしてら。

なんか、かぁいい。

あ、違った。

なんか、可愛い。

で、扉を開けた。

「わあっ！お兄ちゃんに聞いたとおり！お兄ちゃんに似て、可愛いね！アホ毛がはてなマークなのが一番気になるけど！」

すごいハイテンションだ・・・・。

どさくさにまぎれて、僕に抱きついてきたことに関してはノーコメントだ。

父さんがどんな説明をしたかは知らない。

だが、まだ吸血鬼の体質とかのことは話してないはずだ。

タイムトラベルなんて、信じてもらえないだろうしね。

「苗字がゲリラ豪雨みたいな名前なのは突っ込まないから、中に入れてよ甥っ子」

「突っ込まないのは当たり前だ。中に入れないよ、月火さん」

「あれ？叔母さんって言わないんだ？いやー、ドキドキしちゃったなあ！叔母さんとか言われると思って！」

猛烈に照れる、２３年前の叔母。

中学二年生。

この時代では、『栂の木ニ中のファイヤーシスターズ』の参謀担当のようである。

そして、とにかく僕の頭を撫でる。

とにかく、部屋に入り込もうとする。

さすがは、我が家の血筋。
説得して入ってきやがった・・・。
しかも、正論。
「ミカちゃん、ジュースとかないのー？」
「麦茶なら、あるがな」
「あ、ツッキー。それなら、わらわも」
「アハハ。変な喋り方するんだね、お姉さん！」
うわあ。
浴衣少女と花魁口調の大妖怪が打ち解けてる・・・。
無理もない。
聞いた所によると、月火お姉ちゃんは宿主が寿命まで憑くと言う、しでの鳥の怪異らしいから。
麦茶を嫌々僕は入れて、彼女ときくねに持っていく。
きくねが僕のことを『月読』と言わなくなったのは幸いでしかないが、何故、来たのだろう？
「実はね、未来の甥っ子に相談があって。最近の火憐ちゃん、何故

か元気がないの」

## かれんインパクト０２（前書き）

１７話目です！
Ｄｅｍｉ終わらせました。

## かれんインパクト02

その後、月火さんの話を聞くことに。

なんでも、最近、火憐さんがジャージを着ないらしい。

ジャージといえば、火憐さんの鎧であり、戦闘装束。

いや、仮面ライダークウガのベルトと言ってもいい。

それくらい大切な代物なのだ。

「なんで、ジャージ着ないの？」

「私にも分からないよー。ミカちゃん、どうにかならないかなー？」

すっかり空になったコップを月火さんは突き出してくる。

まだ、飲むのか？

軽く3杯は飲んでるぞ？

そこまで麦茶が美味しいのか、口の中が乾いてるのか。

そのどちらかだな、

「どうにかして、って言われてもなあ・・・・」

麦茶をまた淹れてやり、僕は言葉を濁す。

「ねえ、出来るの？出来ないの？」
怒ったようです。
まあ、僕が悪いのかもしれないけど。
「やってやるさ。」
「ホント！？ミカちゃん、大好き！」
飛びついてくる、月火さん。
それを見て、きくねはかなり怒っている。
無理は無いか。
目の前で浮気されているようなものだし。
「わらわも大好きじゃ！」
コイツも抱きついてきたよ。
月火さんって彼氏いなかったっけ？
いいのだろうか？
いくら、未来の甥とはいえ。
そこは、神のみぞ知る。

僕のみぞ知らない。

上手い？

上手くない？

まあ、いいや。

嬉しそうな月火さんを見るたびにおもうのだが、安請け合いをして損をしたのは内緒だ。

誰にも言うなよ？

## かれんインパクト03

「つーか、父さんは？」

「お兄ちゃん？お兄ちゃんなら、どこかに行ったよ。たぶん、山だね。」

ああ、この時期は撫子さんの事件のときか。

うーん、特に怪異が絡んでなさそうだけどな。

まあ、怪異だけとも限らない。

人間関係ほど、面倒なものはない。

そう考えると、人間関係が薄すぎる僕の父親はラクかもしれないけど、僕としては夏休みとかに友達と遊びたい。

寂しいのは嫌だし。

「さてと！ミカちゃん、行こうか」

「どこに？」

「決まってるでしょ？私の家だよ。お兄ちゃんの家でもある家だよ」

「何故、二度言った。」

「大事なことなので、二回言ったの。ていうか、突っ込むんだね。

血筋かな？」

月火さんは、畳に座り込み、足をバタバタさせる。

バタバタするなよ。

下に響くじゃん。

「細かいねー、ホントに。じゃ、行こうか」

「ソレを言ってから、数秒は経ってるぞ！？」

気にしない気にしない、と月火さんは笑いながら僕を外に連れ出す。

扉を開けて。

なんか、期待してる顔で見てるよ・・・。

期待しないでください。

添えないから。

僕は鍵をそさくさに閉めて、月火さんを待たせている階段下に向かう。

笑ってる。

恐ろしいと思うほど、爽やかな笑顔で笑ってる・・・・。

そして、さりげなくとしか言いようがない速さで僕の手を絡ませて

きた。

はっはー。

叔母よ、彼氏いるんじゃなかった？

「いいよ。お兄ちゃんにミカちゃん似てるし、蝋燭沢くんも何も言わないよ！」

嬉しそうな月火さん。

まあ、町内最強と呼ばれてるからな。

父親が。

誰も文句が言えないほど、存在感を醸し出しているとのこと。

中学時代がすさまじく、かなり警察にお世話になったらしい（血筋なのか、卯月もお世話になってます。本当に、迷惑な奴だ）。

ちなみに、祖父と祖母は警察官。

世も末だ。

「おう、月火ちゃんじゃねーか。・・・ん？その横にいるのは、人類史上初のタイムトラベルをしでかした、あたしの兄ちゃんの息子じゃねーか！」

・・・問題の人がいた。

つーか、ジャージじゃん。

ジーッと月火ちゃんを凝視。

「火憐ちゃん、アレはもうやめたの？」

「アレ？なんのことだ？」

ば、馬鹿だ・・・。

失礼なこと言っちゃったけど。

「まあ、いいや。ていうか、兄ちゃん、身長高くなったなー」

満足げに僕のアホ毛に触れる。

あの、僕は貴方の兄ではなく、甥なんだけどな・・・。

自分の兄と甥を間違えるような、叔母（学生時代）に教えれるはずがなく、僕はされるがままだった。

・・・つーか、きくねにしばかれる。

後日談。というか、今回のオチ。

自分の妹に手を繋がられている、息子に嫉妬した父親（学生時代の）にフルボッコにされました。

その直後、きくねが憤慨していたので説明をしてやる羽目に。

「へえ、ミカヅキの彼女か。つーか、滅茶苦茶スタイルいいな！」

と、大絶賛。

手を出したら困るので、「手は出しちゃ駄目だよ？」

と、念押し。

そのときのきくねが頬を赤らめた原因は依然、謎のままだ。

そのあと、母さんが父さんを引き摺っていった。

しかも、さりげなく、きくねに自然に会釈していった。

・・・女って奴は。

## かれんインパクト０３（後書き）

三ヶ月「なんか、よく分からない話だったな・・・」
月火「うん。でも、ミカちゃんの手の感覚がお兄ちゃんと一緒だったよ！（満足げに親指を立て、こんな顔→＞＜」
三ヶ月「つーか、手ェ繋ぐの？兄妹なのに？」
月火「ミカちゃんは彼女とは繋がないの？それと意味は同じだよ！」
三ヶ月「お、同じって・・・」
月火「文句ある？（ギロ」
三ヶ月「な、ないです」
月火「うん、いい子、いい子」
三ヶ月・月火「次回、つばさラバー！」

## つばさラバー01（前書き）

19話目です！

## つばさラバー01

羽川翼といえば、僕にとっても僕の父親にとっても恩人である。

２３年後、つまり僕にとっては現在。

そのとき、羽川翼は世界一周から帰って来ていて、他の地方の県に住んでいる。

たまに、週末に家に来る（父さんが「羽川に会わないと、死ぬ～！」なんて年甲斐もなく叫んでいるからだと思う。それで来る羽川さん、甘やかしてないだろうか）。

そして、この時代。

羽川（この時代では、こう呼ぶことにしよう）はこの時代でも僕に親切だ。

いや、まだ『抜ける』前だからだろうか？

ま、いいや。

＊

その日は、少々、特別な日だった。

それは、昼の事である。

「デートをしましょう」

食事をしながら、戦場ヶ原（母さん）は阿良々木（父さん）にそういった。

僕は恭子（＊狂骨に作ってもらった弁当）をがつがつと食べている。

父さんは呆けた顔をしている。

その顔は、何度誘っても無理だったのに、と言いたそうだ。

母さんはその後、すぐさま僕のほうを向いた。

「もちろん、貴方も行くのよ、サンカゲツくん。」

「サンカゲツじゃない、ミカヅキだよ。子供連れて行くものなの？こーゆー時」

傍から聞けば、何を言ってるんだ、といいたくなるこの会話。

正直、父さんと僕はソックリなので双子に見えるだろう。

まあ、演劇の練習してると思われるのなら、問題はないけど。

「そうだよ、息子連れていかねーだろ」

父さん、そんな露骨に言わないで・・・。

傷つく。

「ほら、ミカヅキくんが拗ねてるじゃない。阿良々木くん、殺虫剤

飲みなさい」

と、母さんは弁当の箸で卵焼きを掴む。

「ミカヅキくん、あーん」

おい・・・、ここで開けるべきなのか？

すごく、ニコニコしてる。

母よ、横にいる恋人にもしてあげてくれないだろうか？

僕（むすこ）にデレるより先に。

「ミカヅキくん？」

「あーん」

口を開けると、母さんは卵焼きを突っ込んだ。

い、意外にデカイ・・・。

なんとか、噛んで飲み込んだ。

「おいしい？」

「少し大きすぎるけど、おいしかった」

「戦場ヶ原、僕の息子にデレるのは構わないけど、せめて自分の家でしてくれ・・・」

「あら、妬いているのかしら?阿良々木くん。」

そういうなり、僕をサッと抱き寄せた。

そして、無表情で頬ずり。

怖いよ~！

「ふふふ、そんなに嬉しいのね?私に頬擦りされて」

「いや、怖がってるよ!お前、自分の息子怖がらせてるよ!」

「とりあえず、私は今日、サボタージュして準備してくるわ。阿良々木くん、貴方は準備があるでしょうから、後で来て頂戴。ミカヅキくんは・・・、そうね。私と一緒に来て。」

そういって、僕を解放するとそさくさと片付けて教室に戻っていった。

「アイツ、なんかあったのか?」

「さ、さあ・・・」

父さんがそう聞いてくるけど、あんまりよく知らない。

人の感情を読むのは得意じゃないから。

つーか、きくねのことには触れないんだな・・・。

別にいいけど。

なんというか、今からでもワクワクしてきた！

## つばさラバー02（前書き）

昨日の花火が綺麗でした

## つばさラバー02

放課後。

引き摺られるようにして、僕は母さんに民倉荘に連行されていった。

一緒に帰ろう、といわれたので部屋の中に入るのかと思えば、そうでもなかった。

「とりあえず、着替えてきて頂戴」と言われたので、帰宅した。

「遅い！遅いぞ、ヅッキー！」

「僕、ヅッキーになったのか！？」

「お姉さまはあんたが居なくて、寂しかったのよ！」

恭子ちゃんもキレテらっしゃる。

とりあえず、感想を言っておこう。

「弁当、美味かった。」

恭子ちゃんは動きが止まった。

そして、顔が真っ赤に。

「そ、そうですか。じゃ、私は買出しに行ってきます」

とだけ言って、恭子ちゃんは外出した。

つーか、頭の蛇とか大丈夫なのか？

「問題ない。とりあえず、わらわの愛おしい妖魔よ。なにか、用事でもあるのではなかろう？」

「やっべえ！結構時間、経ってもねえか・・・」

ケータイを開くと、『15分くらい、貴方の彼女と歓談しておいて。』と母さんからメールが来ていた。

横から、きくねはニコーっと笑いながら、覗き込んでくる。

「わらわといちゃつかないか？」

座っている僕の隣に座り、肩に頭を乗せてくる。

瞳を閉じて。

気が付けば、手を絡ませられており、離さない、と言った感じだ。

「えっと、きくねさん・・・？」

「天下の羽衣狐とあろう者が、お前のような奴に惚れてしまうとは」

『魅了』。

それは、夢魔でない昼間に起こる副作用だ。

ゴールデンウィークと違って、傀儡人形にするチカラはない。
だけれど、『人間でない』者を魅了してしまうのだけは残ってしまった。
つまり、異性の生きとし生ける者に好かれるのだ（虫以外）。
言うならば、蜥蜴にも好かれてしまう。
蜥蜴はキライっ！
「わらわは、お前にめろめろだ。愛おしい妖魔」
頬に触れつつ、きくねは顔を赤らめた。
腕時計をチラリと見ると、１５分経っていた。
「なあ、１５分・・・」
「あ、そうだったな。用事、か・・・」
物憂げな表情を浮かべている。
寂しいのか？
「色々終われば、どこか連れて行ってやるよ。」
「本当か！？」
立ち上がって、僕に飛びつくきくね。

シャーッ！

可愛い！

「その前に、現代に戻ってからな」

「うう・・・」

「嘘だ。過去の古銭なんか持ってるかわかんねーけど、可愛い可愛いご主人様がくれた黒い翼で連れて行ってやるさ」

ぱああ、と明るくなり、満面の笑みを浮かべるきくね。

「ちゃんと、責任取れよ？」

といわれて僕は見送られた。

民倉荘の階段を降りて、待ち合わせの場所に行くと、ジープが停まっていた。

後部座席には母さんと父さんが乗っている。

運転しているのは恐らく、お祖父ちゃんだな。

まあ、本人に孫です、なんて言っても信じないような気がする。

「遅かったわね。」

「きくねが甘えてきたもんで」

「なにしてんだか・・・・」

父さんが呆れるのと同時に、「お父さん、車を出して頂戴。ミカヅキ君が来たみたいだから」

と言った。

どうやら、僕はあの『シーン』に搭乗したようだ。

## つばさラバー03

車内。

なんだか、気まずい雰囲気が流れている。

後ろのほうで何か話しているようだけど、よく聞き取れない。

幸い、月は雲に隠れている。

今は変身したくない。

お祖父ちゃんは普通の人間だ。

いくら、寡黙とはいえ、人外なんて見たことないに決まっている。

変身・・・したくない・・・・。

僕は深い眠りに落ちてしまった。

＊

「ミカヅキー！」

小声で父さんが僕を起こす。

「戦場ヶ原が用意しに行くとかいって、行ってしまった。年上の男とどう話せばいいかわかんねーよ・・・」

父さんは思い切り、弱腰だ。

「・・・阿良々木くん、とか言ったね。」

「はい、阿良々木暦です。」

なんつーか、俳優みたいな声だ。

系統は立木文彦さん。

「そして、阿良々木三ヶ月くん。君はなんでも、２３年後からやってきた、とひたぎに聞いたよ」

マジか。

つーか、信じないだろうね。

タイムトラベルを孫がしたなんて。

「最初は驚いたよ。小説の中だけ、だと思ったものだからね。だけど、どこか君の雰囲気はひたぎに似ている。君が車に乗ってきたとき、そう感じたよ」

父親に似ているとは思ったけど、まさか母親似だとはね。

驚いた。

「なんでも、君達は娘の病気を治すのに手を貸してくれたそうじゃないか」

病気。

それが、母さんの怪異に出会ってしまった理由だ。

怪異にはソレにふさわしい理由がある。

「僕たちは、たまたま娘さんの近くにいただけであって、本当は誰でもよかったんです。最後は娘さん自身のチカラで治したんですから」

ごもっともだ。

でも、僕は何もしてやしない。

「それでもいいんだ。ひたぎが必要な時に君達がそばにいてくれたらいい。先ほどまでの君達は楽しそうだったよ。ひたぎから「貴方達のようにはならない」と聞こえてきそうだった。いつも、喧嘩ばかりしていたからね。」

母さんと父さんが何を話していたのかは知らない。

でも、楽しいならそれでいい。

身体を張って守る甲斐があると言うものだ。

「いつだったか、ホッチキスを持って暴れたことがあった。あれが最後だったな」

人には二種類の存在がある。

嫌われても敵わない相手と嫌われたくない相手だ。

「そんなことはないと思います。」

父さんはそれ以上、何を言っていいのか分からなかったようだ。

母さんが帰ってきた。

「おや、お姫様が帰ってきたようだぞ」

言い回しがなんと言うか、親父臭い。

これぞ、オヤジギャグだ。

「お父さんはこのまま、仕事をして頂戴。帰りはまた連絡するから。」

父さんが引き摺られるようにして降りて行った後、お祖父ちゃんに呼び止められた。

「阿良々木三ヶ月くん。いや、未来の僕の孫、三ヶ月。ひたぎと阿良々木くんを守ってやってくれ」

表情は見えない。

返事は一つ。

「分かりました」

そのあと、すぐに電話がかかってきた。

降りると、父さんが頭を掴まれて下を向いていた。

「遅かったのね」

母さんは無表情だ。

もう少し早く、と言った感じが見える。

月が雲から出てきた。

僕の姿が変わっていく。

黒い翼が生えて、爪が伸び、牙が生えて尻尾が生える。

夢魔――――『修羅月夜の君』としての姿だ。

「歩こうかと思ったけど、ミカヅキにそんな黒い翼があるのを忘れていたわ。」

てへ、と自分の頭を小突く。

顔が無表情だから、怖い。

「何考えているの？」

頬をつつかれた。

父さんの頭を掴んでいないほうの手で。

「じゃあ、皆さん。行きましょうか・・・」

ごまかすようにして、僕は父さんと母さんを背中に背負った。

怪異の状態だし、怪力が出ている。

全然、重くない。

あと一人なら、行ける。

「ひゃー！すげえ眺め！」

父さんが感激している。

空を飛んだことがないからだろうな。

「すごいわ、ミカヅキ。さすが、私の息子ね。感謝なさい」

たぶん、無表情だろうけど、嬉しそうだ。

「・・・あそこよ」

数分後。

母さんが指差した方に僕は降りる。

ブルーシートが轢かれていた。

「これに寝るのか？」

父さんが僕の背中から降りて、ブルーシートを指差す。

「ええ。本当なら、ここまで結構時間がかかるんだけれど、ミカヅキがあまりに気が利くものだから阿良々木くんを虐められなかったわ」

露骨に残念そうだ。

なんか、僕が悪いみたいに。

「すげえ・・・」

父さんと母さんが寝転び、空を見上げる。

大きな翼が生えている以上、僕は寝転ぶことが出来ない。

ということで、座ってます。

「眠ったら、殺すわよ」

「冬山かよ！？」

「アレが、デネブ、アルタイル、ベガ。」

母さんが指を指したほうを父さんが見ている。

僕の出番はなさそうだ。

素直に座っていよう。

「これだけ。不器用なお父さん、可愛い後輩。そして、星空」

母さんがサッと目を閉じる。

何を思い出しているのだろうか？

色んなことだろう。

僕には想像がつかない。

「私の体、というものもあるけれど。」

「・・・・」

なんと答えればいいか、わからないらしい。

「正直、私は怖い」

「付き合う前まではそうでもなかったけど阿良々木くんを失うのが、怖い。阿良々木君は、バイキングで値段の元を取ろう、と思ってたくさん食べる浅ましい人間ではないよね？」

沈黙が続く。

ようやく、父さんが口を開いた。

「ああ。」

「阿良々木くん、私のどこが好き？」

「全部だ。好きじゃないところはない。お前は僕のどこが好きなんだ？」

「優しい所。可愛い所。私が困っているときに助けてくれる、王子様のような所」

大分、聞いたのと話は違うけど、ま、いっか。

「・・・ミカヅキ。」

「はい」

名前を呼ばれた。

僕を見上げて。

優しい声で。

「貴方のおかげで、阿良々木くんに出会えた。わざわざ、２３年後の未来からごくろうさま。

・・・私の宝物」

最後のとこがよく聞こえなかった。

いいけどね。

「そういえば、あの下種はわたしの身体だけが目当てだったから、唇を奪おうとはしなかったわね。

キスをしてくれませんか・・・、キスをしてくださいませんか・・・。キスをしましょう、阿良々木くん」

「・・・最終的にそう落ち着くか」

つーことで、父親と母親の初デートの日は無事に終了。

## つばさラバー03（後書き）

書くことがないのが、悔しくて仕方ない^^；

## つばさラバー０４（前書き）

被を超えました！

## つばさラバー04

昼。

恭子ちゃんがどうやら、京都に行って来るようで、そのことについて置手紙がしてあった。

『少し、用事がありますので、京都に行ってきます。お姉さまの事、頼みましたわよ？
月読様　恭子』

クッ、ついに恭子ちゃん、名前を気に入ってくれたか。

よく見ると、続きがあった。

『追伸。お姉さま、そいつと寝てはなりませんよ？お姉さまが汚れます』

きくねが横でチラリ。

そのあと、物凄い速度で紙をビリビリに破いた。

学校はと言うと、僕だけ帰らされた。

何故か、学校で僕の存在が『なかった』ことにされて、僕は追い出されたのである。

そろそろ、帰らないとな。

現代に。

『ご都合主義』という奴なのだろうか。

もしかすると。

改めて、直江津高校の三年の名簿を見てみると、『ゴウウフラシ・ミカヅキ』なんてどこにも載っておらず、ミカヅキの字すら見なかった。

制服も消えており、僕がこの世界に存在していた証はどこにもなかった。

唯一、残っているものは母さんと父さんと駿河のおねーちゃんの『認識』だろう。

怪異でもある僕は、人間に認識されないと形が変わったり、消えてしまう。

まあ、横で紙をビリビリに破いている主人が要る限り、それはないか。

「どうした？」

現在、我が主にして彼女の衣羽（いはね）きくねは黒いワンピース姿。

ボディラインが強調されており、かなりエロい。

いや、そんな目で見ちゃいけないって分かってるんだが・・・。

高校生だから、うん。

「それにしても、わらわとお前だけだな。この一週間は」

早速、きくねは僕の首から手を回して抱きついてくる。

僕は畳に座っている状態なので、自然とそうみえてしまう。

まあ、見てる人なんていないんだけど。

時間帯としては、今日は父さんがブラック羽川に覚醒した羽川さんに襲われる日。

今回の事も、僕がかかわることなのだろうか？

「そうだな。」

「ん？嬉しくないのか？」

肩から覗き込むようにして、きくねは僕を見る。

少し心配そうで、そこがまた可愛い。

「なんでもねえよ。」

適当にごまかすと、きくねは頬を膨らませる。

よし、結婚しよう。

「べ、別に構わないが・・・。」

顔を真っ赤にして承諾してくれた。

ヒュウ！

このあと、お見せできない出来事が延々と続いた。

ちなみに、キスもしました。

ファーストキスです、僕にとって。

まさか、美女な妖怪ちゃんとするとは思わなかったよ。

４時を過ぎた頃。

電話がかかってきた。

母さんからである。

「ミカヅキ？一つ頼みたいことがあるんだけれど」

「はい？」

なんのことだろう。

ていうか、この時代の母さんに電話されるの、初めてじゃね？

「阿良々木くんを守ってあげて。さっき、電話があったんだけど、ただ事じゃなさそうだわ。

私は文化祭の用意を羽川さんの代わりにやらなきゃいけないので、

忍ちゃんを探すことは無理。
ミカヅキにとっての現代に帰るんでしょう？」

「うん。」

当然の事だ。

あそこが僕の居場所。

この世界で忘れられても、僕は帰る必要がある。

「何故か、貴方に電話したくなったのよ」

理由は知らない。

本能か何か、だろう。

母親の勘、って奴だろうか。

「最初こそ驚きはしたけど、ありえないと思わなくなったのよね。
あの阿良々木くんの子供だもの。
小説の中にしかありえない、タイムトラベルだって出来ると信じることが出来た。
ここまで、私を信用させるなんて、重大事件よ。
・・・責任取りなさい」

きくねと先ほど、いちゃついていた時間は一体、なんだったんだろう。

少し、深刻な話だというのに、彼女は少し笑っているように聞こえ

る。

「大丈夫。ちゃあんと、父さんと付き合って結婚してくれたら、僕は生まれる。
勝手にタイムトラベルして帰ったって、また会えるじゃん？その代わり、名前は【三ヶ月】だからな？
男の場合」

諭すように僕は言う。

別れの言葉のようだけど、ソレはそれでいい。

いずれ、僕も帰らないといけない。

ながらく、家に帰ってないなんて家出息子にもほどがある。

ちょうど、学校が夏休みでよかったけどね。

「分かったわ。」

それだけ言うと、母さんは電話を切った。

「お前は優しいんだな。」

背後から僕を抱きしめながら、きくねは言う。

「父君と母君を大切にするとは、さすがは、わらわが見込んだ妖魔。
帰って来てからでも、わらわはお前といちゃついてやる。だから、
今は父君を探して来い」

気がつくと、きくねは僕の膝の上に座っていた。
しかも、僕のほうを見て。
そして。
きくねは僕にキスをしてきた。
頬のするやつではなく、ベロチューである。
「んんっ！」
声が出ない。
きくねは妖艶に笑って、僕の舌を絡ませる。
何時間か経ったと思ったときだ。
きくねは僕の顔からそっと、両手を離した。
「お守りだ。早く行くなら行け。」
きくねは僕を撫でたあと、眠ってしまった。
妖力を篭めたのだろうか？
「行って来ます、ご主人様」
僕は扉を開けて、外に出る。

鍵をかけてから、僕は即座に階段を下りた。

夜まであと、2，3時間。

さて、探しに行くとしよう。

## つばさラバー05

外を出て、すぐの所に八九寺ちゃんが居た。

「おや？スメラギさんじゃないですか。」

「どこの武力介入組織の戦略予報士だよ。僕の名前は阿良々木だ。」

まさか、八九寺ちゃんに噛んでいただけるとは。

光栄の極まりだ。

「？阿良々木さんじゃないんですね。さしずめ、息子さんと言うべきですか？貴方は」

うん。

なんて、理解力が凄いんだろう。

我が父の知り合いと友人は。

忍野はともかく、八九寺ちゃんとは面識がない（２３年後にようやく、出くわすとこだ）。

「まあ、そうだけどさ。父さんに出くわさなかった？」

八九寺ちゃんは、ハァ、とため息をついた。

「こんな好青年も、やがて父親のような変態さんになってしまうの

でしょうね・・・」

「ど、どういうことだよ！？」

何故だ。

他人事な気がしない。

「まぁ、いいでしょう。八九寺Pたるもの、この程度のミスを見逃さずにしてどうします？」

「命令だ！八九寺ちゃん。僕を傷物語の映画に出せ！」

これで、僕も映画界デビュー。

さぁ、どうする！？

八九寺P！

「いや、いくらミカヅキさんでもそのお願いは聞けませんよ」

つーか、名前知ってるのな。

父さんが教えたんだろうな、きっと。

「もう、阿良々木さんと羽川さんがイチャイチャする内容ですので」

「趣旨が変わってないか！？」

それはさておき、と八九寺ちゃんはベンチに座る。

古畑任三郎のように、勿体つけながら。

「貴方、確か夢魔でしたよね？」

「ああ。」

夢魔に名づけられた。

それが、僕がここに居る理由だ。

怪異にはそれにふさわしい理由がある。

夢魔に『真名』を名づけられたことにより、僕はありとあらゆる異性を虜にする『魅了』を手に入れてしまった。

酷いときは、同性ですら虜にしてしまうのだ。

ゴールデンウィークの間中、僕は夢魔退治の専門家と戦っていた。

エクソシスト、と言うべきだろう。

「なんというか、初めて見たときは驚きました。阿良々木さんにあまりにも似ていたので。」

「・・・よく、言われるよ。」

ついつい、苦笑してしまう。

父親に似ている。

それが、よく言われるセリフだ。

「そういえば、どうなさったんですか？」

本末転倒になりそうだったのを察したのか、八九寺ちゃんは僕に聞く。

そろそろ、夜だ。

怪異が動き出す。

つまり、それは僕が怪異と化す時間だ。

僕はこの状態をデビルマンと呼んでいるが。

わかんない人はウィキを見てね。

「ああ。父さんがどこに行ったんだろうなー、とおもってね」

「阿良々木さんですか？確か、向こうに行きましたよ。忍さんを探してるとか何とかで」

と、八九寺ちゃんは左方面を指差した。

「ありがとな！」

そういって、走り出すと後ろから声が聞こえる。

「蒸しパンを買って下さいねー！未来で」

買えねえよ。

金欠なのに。

## つばさラバー最終話（前書き）

つばさラバー、最終話です。

## つばさラバー最終話

あのあと、僕は誰にも出くわさなかった。

誰かと通り過ぎたのだけは覚えている。

露出の多い着物を着た女性だ。

なんというか、雰囲気がきくねと似ている。

誰だろうか？

なんだか、嬉しそうだった。

誰だかは最後まで分からなかった訳だが。

そして。

僕は着いた。

父さんとブラック羽川が対峙しているところに。

僕は今、デビルマンのような姿になっている。

ウインドブレーカーの背中からは黒く大きな翼が飛び出ており、両手の爪は鋭く伸びており、犬歯が伸びている。

少しずつ、僕はゆっくりと歩いていく。

父さんの声が聞こえる。

「・・・そういったことは、羽川本人が言うべきだ。怪異であるお前が言うべきじゃない」

「俺はご主人のストレスにゃん。誰が言おうと、関係にゃいだろ？」

嫌悪したかのように、ブラック羽川は目を細める。

何故か、僕の存在には気付いていない。

影に居るからだろうか？

「だがにゃ、ご主人のストレスを消す方法があるニャ」

「ほ、ホントか！？」

ブラック羽川の言葉に顔を輝かせる父さん。

全く、なんてお人よしなんだろう。

漬け込まれてもしらねえぞ？

「人間、お前がご主人と恋仲になればいいにゃん」

その言葉が僕の中に突き刺さる。

ここで、父さんがＹｅｓ、と答えてしまったら、僕は存在できなくなってしまう。

因果の関係か、僕は別ルートで生まれるかもしれない。

でも、それは嫌だ。

阿良々木暦と阿良々木ひたぎの他人になるなんて、嫌だ。

「それは、無理だ。」

父さんが言った。

「羽川のことは大好きだし、感謝もしている。だけれど、それは無理だよ」

「どうしてにゃん？ご主人の深層意識でもある、俺は知っているにゃん。お前が誰にでも優しいと。

ということは、特別な人がいにゃいと言うことにゃん。今付き合っている女だって、お前はなんとも思ってないんだろう？向こうから、押されたから付き合ってるんなら、ご主人と付き合えばいいにゃ」

なんつーか、やりきれない。

なんでかは知らないけど。

「そ・・・」

何もいえないらしい。

僕はゆっくりと近づいていく。

ようやく、僕に気付いたようだ。

「ミ、ミカヅキ!?なんで、此処に。」

驚きの声がするけど、俄然無視。

僕が言ってやんないと。

「さっきから聞いてたらさ、よく思ったんだけど、確かに父さんの言うとおりだ。怪異に頼らず、自分で言うべきだな。好きなら好きって言えよ!自爆覚悟で言えよ!」

今でも思うんだけど、あれは無茶苦茶だった。

さすがに。

「黙れにゃん!この・・・悪魔風情!」

ブラック羽川が四つんばいで走ってくる。

学校の怪談のテケテケみたいだ・・・。

『僕ではない』低く、甘い声がする。

注意しておくが、僕は中二病は発症していない。

「いやァ、なんというか元気がいいですね、ブラック羽川さん。私を傷つけようってんですか?」

よく聞いてみたら、ゴールデンウィークに出くわした夢魔と同じ声だ。

いや――――――これは、僕の声だ。

月明かりと共に、僕は姿を現す。

「夢、夢魔だと・・・・！？」

障り猫より夢魔は上らしい。

ブラック羽川の驚き方からよく分かる。

羽川さんは僕がタイムトラベルしてきたことを知らないらしい。

知っていたのならば、対抗策をうってきただろう。

僕を抱きしめてくる。

それは、呪いの抱擁だ。

エナジードレイン。

吸血鬼のソレが食事であるのに対し、障り猫は呪いだ。

かく言う僕はと言うと・・・食事でエナジードレインをする。

僕はブラック羽川の蹴りをかわし、ブラック羽川の首に噛み付く。

牙から流れ込んでくる、怪異の感覚。

うん、なかなかいい味。

「た、助けて忍！」

実の息子が恩人を吸い取っているのが耐え切れなかったのだろう。

忍姉さんが僕を蹴り飛ばし、『ブラック羽川』を吸収し始めた。

今のおねーちゃんの表情は怖い。

「きくね、恭子。助けて」

その名前に心当たりがないのだろう。

おねーちゃんは首をかしげる。

その次の瞬間だった。

火を纏った車輪のある、篭を引いている火を纏った大きな猫が現れた。

いや、虎か。

中から、恭子が顔を見せる。

「お兄様！早く乗ってくださいな」

そして、きくねが姿をあらわした。

「おかえり、わらわの愛おしい妖魔」

彼女が伸ばしてきた手を僕は握り、火車に乗り込む。
唖然としている、父さんを置いて。
僕、阿良々木三ヶ月はここにて失踪した。
後日談と言うか、今回のオチ。
僕たちは北白蛇神社に来た。
「ひえー、神社ですかー」
「きくねはどうだ？」
露光に恭子が嫌そうな顔をしていたので、きくねに聞いてみる。
きくねはニコリと笑って、僕に抱きついた。
「お前が行く所なら、わらわはどこにでも行こう」
と、結界を親切なことに張った。
しばらく、ここで暮らすかァ。

## つばさラバー最終話（後書き）

三ヶ月「次回が最終話かもしれない！」
翼「それはそうと、三ヶ月くん。阿良々木くんに似てるよね、ホント」
三ヶ月「マジですか？（照」
暦「コラ、三ヶ月。僕の羽川に手を出すな！」
翼「阿良々木くんの物になった覚えはないけど（ジト目」
三ヶ月・暦・翼「主人公消失！？無責任すぎるにもほどがあるぜ（よ）なサンカゲツが消えた。次回、つばさリード！」
翼「うーん、三ヶ月くんのアホ毛ははてなマークなんだね（アホ毛に触り」
三ヶ月「そ、そうですよ～（赤面」
暦「僕の話を聞けえー！

## こよみゲンガー01（前書き）

このお話は、羽川さんが語り部です。

## こよみゲンガー01

私には記憶が飛んでいる。

ゴールデンウィークの記憶が。

全然覚えていないのだけれど、阿良々木くんのような姿を見たのは覚えている。

そして、一週間前。

なんというか、デビルマンのようなのを見た。

角を生やして。

鴉のような両翼を生やして。

そして、鋭い牙と爪を生やしていた。

「やっぱ、無理だアアアアアアアアア！神社に潜むなんて無理だアアアアアアアア！」

声が聞こえた。

少し大きな声。

廊下に敷いていた毛布から起きて、玄関の扉を開ける。

私は廊下で寝ている。

これを話したら、友達を失ってしまった。

玄関の門の細い所に立っていたのは、デビルマンのような姿の阿良々木くんに似ている少年だった。

尻尾付き。

先端が三角形。

角、生やしちゃってるよ・・・・。

猫耳を生やしていた私が言うのもなんだけれど。

「あ、こんばんは。デビルマン風貌の阿良々木三ヶ月です」

キラッ☆とランカポーズ。

どことなく、戦場ヶ原さんに似ている。

「初めまして・・・かな？こんばんは。羽川翼です」

自己紹介。

うーん、ここまで初めて会ったときはお父さん（阿良々木くん）とは違うな・・・。

ここまでフレンドリーだし。

しかし、どことなく一方通行（アクセラレータ）のようにもみえる。

「というか、そんなところに立っているけど大丈夫なの？」

「問題ないです。なぜなら僕には超絶バランスがあるから！」

超絶バランス！？

やっぱり、阿良々木くんと似ているところがある。

変なところに自信を持つところとか。

「というか、ゲンガーな父さん見ました？」

ドッペルゲンガー。

自分ソックリのコピーが現れ、三日以内に見た人は死んでしまう。

「三ヶ月くん、それって、どういうこと？」

「ええ。実は、今日の昼間に見たんです。アホ毛が左右非対称になってる奇妙な父さんを」

それって、アニメの表現だと思うんだけどなぁ・・・。

まあ、確かに三ヶ月くんにも生えてるよね。

はてなマークのだけど。

「なんていうか、此処で話すのもアレですから、散歩しません？」

人懐こそうな笑顔を浮かべる三ヶ月くん。

大きな鴉のような翼をどうするのかと思ったら、鳥の翼のように折りたたんだ。

彼が着ているウインドブレーカーの背中には二つの裂け目がある。

おそらく、翼を生やしたときに破れたんだろうと思う。

こうやって、夜に散歩するのは久しぶりだ。

ゴールデンウィークの時は、阿良々木くんと歩いた。

そして、今は阿良々木くん曰く、『２３年後からきたらしい』彼の息子と歩いている。

二本の角を生やしているのと真っ赤な目のインパクトが強いためか、その幼さを際立たせるベビーフェイスがなによりもギャップを生み出す。

先ほどの笑顔といい、夢魔だというのは本当みたい。

「・・・なんつーか、思ったんですけど、僕がタイムトラベルしてきた方法について聞いてこないんですね？というか、髪切りました？」

彼は不思議そうに首をかしげる。

髪を切ったことについては最初から気付いていたのだろう。

たぶん。

それだけをいいたいがために、タイムトラベルの件を持ち出したかもしれない。

「君が言わない限り、私は聞くつもりはないよ。・・・というか、なんで敬語？」

いくら、時系列があるとはいえ、三ヶ月くんは同い年のはず。

同い年の子に敬語を使われるのは慣れていない。

「そうですか・・・。敬語の事ですか？それはですね、２３年後に戻ったときに羽川さんに為口を使わないためです。使ったら、父さんに拳骨喰らいますから」

苦笑する三ヶ月くん。

おそらく、１７歳だと思うけど、彼は反抗期になったことがないようだ。

結構、最近では珍しい種類の子なのかな？

「あんまり、逆らいたくないんですよねぇ。ゴールデンウィークのこともありますし」

ゴールデンウィークに彼も何かがあったようだ。

浪白公園に入ると、私はブランコに座ってゆっくりと漕ぐ。

背中の翼があるせいか、彼はブランコに座らず、ブランコの柱にもたれていた。

「なにかあったの？」

思わずきく。

ゴールデンウィークに私も怪異を経験したのだから。

「・・・聞いたあとに不快になってしまったら、僕を嫌っても構いません」

そして、三ヶ月くんは語り始めた。

## こよみゲンガー02

「羽川さんが明日、休みなようなので、話したいと思います。

今から話す出来事は、両親にはいっていません。

まず、出生からお話しましょう

「この僕、阿良々木三ヶ月はご存知の通り、阿良々木暦とその彼女、阿良々木ひたぎの息子です。

物心付くまでは、僕は何もおかしくはなかったみたいです。

そう、なんにも。

しかし、事は小学生の時におきました。

元々、運動神経や治癒力が発達していたせいなのか、運動はよく出来たし、怪我もすぐ治っていましたから、小学校に入ると、かなり不気味がられました。

いえ？父を悪く言っているのではないんですよ。

ただ、父は僕を『普通』にしたかったみたいですね。父曰く、『ある事件』で同じようになったことがあるといっておりましたので。

そして、事件が起きました。

あれは、ちょうど小学三年生のことだったと思います。
性悪な上級生に体育館裏に呼び出されたのです。
イマドキ、古いですけどね。
彼らは集団でいました。
持っていたのは、図工で使うノコギリ。
なんで、そんなものを持っているのか、と聞くと『お前を切り刻んでも、どうせ再生するんだろ？見せてみろよ！バケモノ！』
と言ったのです。
僕はショックでしたね。
自分がちゃんと、周囲に受け入れられているのだ、とおもっていたものですから。
誰かが羽交い絞めにしたのですが、僕は本能と言う奴でしょうか？
それでその上級生を蹴り飛ばしたのです。
いえ？
悪意なんてとんでもない。
本能ですよ、本能。
そのあと、かなり怒られてしまいましたけどね。

先生と両親に。

都会の学校に行ってたんですけど、なんでしょうね。

相手の両親が控訴しなかったんです。

不思議ですよね、自分の子を殴り飛ばしたと言うのに。

なんでも、言うことを聞かないで困ったとか。

僕は気分が悪かったですね。

殴ったのに、怒られないなんて。

そうですね、暴力はするべきでない。

そして、時が経ち、ゴールデンウィーク。

僕は夢魔に真名を付けられました。

真名ってご存知ですか？

そう、三国志の孔明にもありますよね。

それを呼ぶのは、大抵は敵だったりするんです。

そのとき、僕は初めて怪異を知りました。

自分がなんなのかを。

夢魔に出くわした理由はよく分かりません。
怪異にはそれにふさわしい理由がある。
ですが、僕にはそれが分からない。
ゴールデンウィークの間、ずっとエクソシストと戦ってました。
そう、学生時代の父のように。
歴史は繰り返される、って本当のことですね。
身をもって知りました。
・・・どう思われますか？」

## こよみゲンガー０２（後書き）

花物語の沼地さんが一人で話し続ける章があったので、それを参考にしました。

## こよみゲンガー０３（前書き）

あと二つのお話くらいで化物語（次）は終了します。
前日譚・「惑物語（仮）」をお送りしたいと思います。
皆様の期待に添えれるかわかりませんが＾＾；

## こよみゲンガー03

私は言葉を失った。

彼の過去は、私と比べ物にはならない。

「普通の女の子」になろうとした私。

「普通の人間」になろうとした三ヶ月くん。

言葉こそ同じだけれど、全然違う。

どうしてだろう。

過去の出来事を語る、三ヶ月くんはかつての私のように他人事のように捉えていない。

やっぱり、阿良々木くんの子供だからなんだろうね。

強いんだよ、君は。

「まぁ、元から変な父親ですけど、分かり次第教えてくださいね？・・・あと、二日ですから」

「え？」

その言葉を頭の中で復唱。

阿良々木くんとドッペルゲンガーが入れ替わるまで、あと二日。

ドッペルゲンガーの対策については、私もよく分からない。
彼は知っているのだろうか？
三ヶ月くんは。
屋根の方を見ると、不審な人影が。
「・・・ドッペルゲンガー」
「え？」
また、同じ反応をしてしまった。
人影が降りてきた。
月明かりに照らされる、その姿は―――阿良々木くんそのものだった。
少々、似ていないところがあるとするならば、雰囲気と風貌だ。
普段の彼は此処まで好戦的な雰囲気ではないし、爪も伸びておらず、牙もない。
ここに居るのは、「春休みの伝説の吸血鬼だったころの阿良々木暦」。
「まさか、俺の原種の餓鬼が現れるとは思わなかったぜ。」

「・・・父さんは、そこまで好戦的でもない。その顔でその声で羽川さんと僕の前で話すな。もちろん、僕の叔母と母親や、神原さんの前でもだ。」

三ヶ月くんの目が怖い。

まるで、吸血鬼のような目。

「羽川さん」

「はい。」

「もう、寝ていいよ。」

「！？」

衝撃的だった。

でも、止めないと。

「見てのとおり、これは僕の父さんでもないし、貴方が好きな阿良々木暦でもない。コイツは、ただのニセモノだ」

「へえ、言うじゃないか。修羅月の」

いいかけたとき、三ヶ月くんはドッペルゲンガーを殴っていた。

「それ以上、その声で話そうものなら、僕はお前の心臓を抉る」

完全に目が本気だった。

でも、勝ち目はないといえよう。

伝説の吸血鬼の眷属の頃を模しているのだから。

満月の夜空。

二つの大きな影がお互いにぶつかり合っている。

私に出来ることは、祈ることくらいだ。

三ヶ月くんの勝利を。

## こよみゲンガー最終章

翌日の夜。

三ヶ月くんは私の家の門の細いところにまた立っていた。

今日来ることを予想できなかった訳ではない。

この時間、つまり午前１２時半に来ることを彼は昼間のうちに私に連絡してくれた。

たまに、連絡もせずにどこかに言ってしまう、彼のお父さんとは大違い。

うーん、そこは似てないかな。

「あ、羽川さん。こんばんは～」

そーっと、扉を開けて、私は外に出る。

もうすぐ夏だと言うのに、夜風が冷たい。

三ヶ月くんは昨日と同じ、デビルマンのような姿。

だけど、決して全裸と言うわけではない。

真っ黒で下にファンキーなシャツを着ていて、ジーンズを履いているけど、少しボロボロ。

左肩からはタトゥーのようなものが覗いている。
髑髏から釘が突き抜けているものだ。
ファンキーすぎる・・・・。
彼が決して、刺青をする人間でないことを私はよく知っている。
彼のお父さんは中学時代、法律を向こうにして戦っていたという。
自分の正義を貫いていたとか。
だから、彼が刺青をしないというのは分かる。
きっと、怪異絡みだろう。
「？どうしました、羽川さん。僕に惚れちゃいました？」
「彫刻は彫ったことないよ」
「なんですと！？」
私がジロジロ見ていたせいだからだろう。
彼はきょとん、としながら私を見る。
かわいいったらありゃしない。
でも、それはいってはいけない。

言えば必ず、彼は調子に乗るだろう。
このことは私の心にでも閉じておこう。
いつか、言ってあげよう。
彼がこの先の未来に生まれたら。
「そういえば、あのドッペルゲンガーは？」
一番の疑問。
阿良々木くんに扮していた、あのドッペルゲンガー。
あれをどうにかしないと、阿良々木くんが危ない。
忍ちゃんならどうにかしてくれそうだけど、三ヶ月くんがしたいといっていた。
「・・・倒しました。僕の父を愚弄しているように見えたので」
「・・・そうだよね」
そういうところ、戦場ヶ原さんにそっくりだなあ。
大事なものを誰にも取られまいとする所。
私にあったかな・・・・。
ニイ、と凄惨な笑みを浮かべる三ヶ月くん。

どうしてだろう。

どこかで見た気がする・・・・。

後日談と言うか、今回のオチ。

三ヶ月くん曰く、彼女さんと女中のような女の子を連れてきた。

彼女さんが戦場ヶ原さんに雰囲気が似ている。

そのことについて聞くと、彼は照れた。

照れた彼を見て、彼女さんはにこりとして三ヶ月くんを突く。

仲がいいっていいなあ。

## こよみゲンガー最終章（後書き）

三ヶ月「あと、二話で作者が終わるとか言ってたけど、嘘だから！」
メメ「終わる終わる詐欺って奴かい？」
三ヶ月「まさかの忍野の登場！」
メメ「なんか、無駄にテンション高いね＾＾；」
三ヶ月・メメ「次回、きくねサーヴァント！」
三ヶ月「忍野！ポンデを僕に！」
メメ「ポンデは駄目だよ」
三ヶ月「ええ～」

## きくねサーヴァント01

どういうわけか、僕の主人にして彼女・羽衣狐の衣羽きくねは惚気たがる傾向にある。

僕としては、満更でもない訳だが、神社でいちゃつくのはやめていただきたい。

ただでさえ、カミサマの前なんだし。

その不安を彼女に言うと、微笑んだ。

「何を言うか。わらわの方が偉いに決まっているはずじゃ。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードさえ、日の本に来なければ、わらわが最強だったって言うのに。」

きくねは神社の柱を蹴飛ばす。

おいおい・・・。

なにしてるんだか。

東雲恭子、つまり狂骨はニンゲンに化けて街で買い物中。

きくねが張った、特殊な結界。

その結界のおかげで此処の場所は誰にも見つからない。

夜ではないのだが、僕の今の姿はデビルマンそのもの。

「おーやおや。わっちに隠れて何してるんだか。羽衣狐の分際で、良い男を捕まえたようだねえ」

露出の多い着物を着た女の人。

確か、この人は・・・・。

「あ、確か、三日前の・・・・？」

「わっちを覚えててくれたみたいだねえ？修羅月。」

また、呼ばれた。

僕は修羅月なんて名前じゃないってのに。

僕は阿良々木三ヶ月。

それ以上でもそれ以下のなんでもない。

人間かどうか聞かれたら、答えることが出来ないのが悔しいけどね。

「・・・わらわの物に何の用じゃ？」

きくねは僕に寄り添いつつ、その人を睨みつける。

その人と言っていいのか分からないが、『人影』は二ヤリ、と妖艶に笑う。

「いつから、そんなに偉くなったのかな？この葛の葉様によく逆ら

えるもんだ」

僕の頭をいとおしげに撫でながら、『人影』――――葛の葉は勝ち誇ったかのように言う。

葛の葉。

羽衣狐のきくねと同じく、妖狐の一種である。

前にそういった関係の本を図書館で羽川さんに見せてもらったことがあるが、別物だとは知らなかった。

狐の怪異は皆、姿が違うだけであり、同じだと思っていたからだ。

「お前が『～様』じゃと？ふん、笑わせてくれる。お前を姉だと思ったことは一度もない。たとえ、お前が死のうとな」

その手のマニアが見れば喜びそうな、サディスティックな笑みを浮かべるきくね。

ていうか、ビックリだよ。

きくねと葛の葉が姉妹って。

まあ、似ているところもあるか。

表情と顔とか。

一つ違いがあるとするならば、九尾と獣耳を出しているかの差だろう。

葛の葉が出しているのに対し、きくねは隠している。

「修羅月こと、元・キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属の子よ。わっちに名前を教えてくれないか？お前を気に入った」

少々、頬を赤らませて僕の頬に手を当てる。

きくねはとにかく、葛の葉と関係を否定したがっているが、無理だろ。

顔が赤くなるポイント、似すぎてる。

あと、名前を聞く理由が『お前を気に入った』とか、萌えるだろ。

そんな様子に気付いたのか、きくねはすかさずこう言った。

「三ヶ月を奪おうものなら、わらわはお前を喰ろうてやる」

嫉妬の目で葛の葉を睨む。

女って怖い。

## きくねサーヴァント01（後書き）

きくねの姉が登場！

## きくねサーヴァント０２（前書き）

３０話目です。

## きくねサーヴァント02

その夜。

葛の葉が眠った後、恭子が帰ってきた。

「お兄様！お姉さまに手を出したりやしませんよね？」

訝しげな目で恭子は僕を見る。

なにもしてないよー、と言おうと思ったが、きくねが僕の腕を自分の腕と組んだため、誤解を生むことになってしまった。

「わらわはお前がいない間、月夜の君とこの通り、仲良くしておったぞ？それでは駄目なのか？」

きくねを尊敬以上の目で恭子が見ているのは、この何日間かでよく分かった。

そういえば、いつの間に僕は『お兄様』と呼ばれてんだろう。

恭子に嫌われてたはずなのにな。

「そうですか・・・。というか、そちらに寝ている方は何方なんです？」

恭子は僕の隣に座り、葛の葉を指差す。

「きくねの姉貴だってさ」

「そうなんですか！？お姉さま！」

恭子は驚いているようだ。

それもそうだ。

自分が使えている主に姉がいるなんて全く知らなかったものだから。

「ああ。わらわにとっては、姉でもなんでもないのじゃが。わらわにとって、愛しき妖魔と狂骨が大切じゃ」

きくねは甘えたような視線を僕に向けると、僕の肩に頭を置いた。

恭子は嫌そうだったが、何に吹っ切れたのか、きくねと同じく、僕の肩に頭を置いた。

数秒も経たないうちに彼女らは眠ってしまった。

葛の葉がズルズルと這い上がるように立ち上がった。

「フフフ・・・。めでたい奴だ、わっちの妹は。」

「きくねのことを悪くいようものなら、きくねの姉貴でもゆるさねえよ？」

二人に物質創造力で作り上げた、毛布をかける。

「吸血鬼の物質創造力、夢魔の持つ魅力、悪魔のチカラ。どう考えても不自然だとは思わないでありんす？」

葛の葉は二ヤリ、と口角を上げ僕に近づいてくる。

「どうせ、お前は知らないのじゃろう？自分が生み出された理由を」

僕に額に葛の葉が触れると、辺りの景色がどんどん変わっていく。

時間移動（タイムトラベル）しているらしい。

そういえば、２３年前の母さんや父さんに別れを言うのを忘れてたな。

一番気になることといえば。

ちゃんと、二人が結婚してくれてるかどうか。

「さあ、着いた。ここでお前を殺そうと思う。『作られし者』」

作られし者？

なんだよ、ソレ。

僕は人造人間的な何かじゃない。

阿良々木暦と阿良々木ひたぎの息子のはず・・・。

「お前の過去を覗かせてもらった。ちょうど、お前の頬に触れたときだ。お前、死産で死んでいるはずだったんだぞ？」

そんな話を聞いた事がない。

僕の写真はちゃんとあるし・・・・。

「はははははあはははっははははあはっは！わかってないなあ！全ッ然わかってないなあ！阿良々木三ヶ月いや、死に損ない！お前は反魂の術で生き返った後、消えていた記憶を上書きされただけなんだ！分かってねえだろ！いや、分かるはずも無いか！お前らバケモノなんかにはなァ！」

先ほどの花魁口調とは程遠い、粗暴な口調。

その声を聞き、僕は思い出す。

人生最悪のゴールデンウィーク。

１７年最悪のあの一週間。

自分が何者であるかを知った日を。

「お前・・・、ゴールデンウィークに僕を滅しようとしたエクソシスト・・・なのか？」

## きくねサーヴァント０３（前書き）

もしかすると、このきくねサーヴァントで終わりかもしれません。
ほとんど、ラスボス戦みたいなものですし。

## きくねサーヴァント03

僕をゴールデンウィークの時、狩ろうとしたエクソシストの名を紹介しよう。

ソイツの名は、ベリアルブレイド。

僕を狩ろうとして、父さんの逆鱗を買ってしまったエクソシスト。

どういうわけか、かつて父さんが戦った、ギロチンカッターと言う新興宗教の責任者の後継者だという。

ゴールデンウィークに初めて出会ったときは、巨大な大鎌を持っていた気がする。

今回は持っていない。

だが、ここで問題が生じる。

『何故、ここにいるのか？』だ。

彼は『悪魔を狩ることに悦を感じている悪魔殺し』という、テンプレートな性格を持っている。

仕事でもなく。

使命でもなく。

ましてや、私情でもなんでもない。

ベリアルブレイドは娯楽として、悪魔を殺し続けている。

人間の殺人鬼のように。

その異常性からか、誰も彼に近づこうとしなかった。

僕の『おねえちゃん』がかつて、食料として捕食したギロチンカッターを除けば。

聞いたところによると、ギロチンカッターはベリアルブレイドを普通に引き入れたという。

何のためらいもなく。

ギロチンカッターとしては、対悪魔系怪異として利用するつもりだったのだろう。

おねえちゃん曰く、『血の涙を流すほど喜んだ』と言う。

利用されるというのに、分かっていて利用された悪魔。

僕にはその辺がよく理解できない。

理解できることもある。

矛盾してるけどね。

ベリアルブレイドは悪魔の父と吸血鬼の母の間に生まれた、ハーフだという。

悪魔でもなく、ヴァンパイアでもない中途半端な存在。
僕のように限りなく人間に近い吸血鬼とは違う。
僕も悪魔のようなものだけどね。
「悪魔、わらわの夫に狼藉をするつもりか？」
きくねが起きた。
目を擦りながら。
そういうところが可愛くて仕方ない。
さきほどまで、自分の姉だと思ってたってのにね。
可愛いったらありゃしないよ、本当に。
僕のことを考えてくれて、守ってくれて、僕が守るべき存在。
きくねは、僕と手を繋ぎベリアルブレイドを睨みつける。
サディスティックな表情で。
未だに恭子は寝てるけどね。
現在、深夜1時。
丑三つ時まで、あと一時間と三十分くらい。

夜だから、僕の姿はデビルマンのそれに近づきつつある。
僕は濃く受け継いだ能力である、物質創造能力で巨大な刃を持った、ノコギリを作り出した。
「それは・・・『月夜の君』に代々受け継がれている、『鋸鮫』か」
ベリアルブレイドは驚くそぶりを見せない。
全然、余裕だ。
ベリアルブレイドは葛の葉の姿のままで、懐に手を入れる。
取り出したのは、妙に刃が大きな一振りの鎌。
それをこちらに向けて、ベリアルブレイドは笑う。
おねえちゃんとは比べ物にならないほど、強がりのような笑みを。
強さ的には、おねえちゃんの方が２００倍だ。
きくねと同じくらいか、それ以上だ！
「そこは、わらわが最強！・・・じゃと言ってほしかったのじゃが・・・。まあ、いい」
きくねは僕の背中に回り、抱きしめながら、指の一本で、僕の頬に触れる。

そして、告げる。

ビターチョコレートのように苦くて、白玉のように甘い視線。

艶やかな声で僕に告げるのだ。

『主人からの命令は絶対』を知らせる為。

「修羅月夜の君。わらわの為に、目の前の悪魔をたたっ斬れ。・・・良いか？わらわの愛しい妖魔よ」

どう答えるか分かっている。

過去世界で共に暮らした仲なのだから。

父さんと母さんに紹介したら、なんていうかな？

彼女が狐って言うのは。

「羽衣狐様、その命令、この命の炎が尽きるまで相手が殲滅するまで、戦います」

ここはきくねと呼べない。

そういうシーンではないのだから。

僕は勢いよく、地面を蹴った。

伝承の悪魔のようではなく、伝承の悪魔を退治する英雄のように。

## きくねサーヴァント03（後書き）

人間と言うのは、「人に必要とされたい」思いがあります。
そう思っていなかったとしても、どこか自分の意識の奥底にそういった思いが存在しているのです。
三ヶ月くんや羽衣狐、狂骨もまた誰かに必要とされたい。
だから、寄り添って生きている。
一人が怖いのは悪いことではないと思います。
なぜなら、孤独が怖いということは、一人ぼっちの人とかに優しく出来ると思うから。
きくねサーヴァントでこの物語は終わるかもしれません。
前日談を書く予定はありますが、いつになるかは分かりません。
他の作品も残ってますし。
以上、作者の呟きでした。

## きくねサーヴァント04

敵を切るためだけに特化した、ノコギリ・『鋸鮫』。

それを手に持って、僕はベリアルブレイドに近づいていく。

「ははははあっはあは！死産と言うのはいいまちがえだったな！正しくは、お前は交通事故で死んだんだ！お前の父親が自分の失敗をお前を愛していた、母親に隠す為に反魂の術で蘇らせたのさ！かつてのお前は生きとしいけるものを憎んでいたのを、お前の父親は都合の良い記憶に書き換えた！『ジブンタチヲマモッテクレル、ツゴウノヨイソンザイ』としてな！どうだ？許せないだろう？憎いだろう？俺はギロチンカッター様を殺した、ハートアンダーブレードが憎い！お前も憎いはずだ！都合の良い記憶にして、自分達の身を守らせる為だけに、蘇らせたことに対して」

ベリアルブレイドは僕を怒らせようとしている。

大体分かるよ、そんなのは。

１２年前の記憶が無いから、僕はよく覚えてやしない。

その前のことはね。

だけど、中二の時から、学生時代の父さんにコテンパンにされた奴がこの辺に来たとき、これよりはマシだったけど、挑発ならいくらでもされたことがある。

目が赤いのは元々だけど、カラーコンタクトしてるんじゃないか？

とかなんとか、先輩に絡まれたりした。

そのときだって、挑発されてきたのだから僕はそういう意味では場数を越えてきたと思う。

だから、怪異の挑発なんて乗りたくない。

きくねの挑発とか、恭子ちゃんのなら乗りたいな。

「・・・そんなのはどうでもいい。ことわりを曲げてでも、僕を生き返らせてくれた。つまり、愛されてたってことだろ？十分じゃねえか。それくらい、どうってことねえよ。僕がお前が言うように、父さんと母さんの息子で、一度死んだのなら、僕の父さんなら僕を生き返らせかねないかな。僕の母はヤンデレなんでね。」

きくねもそうだよな。

安倍清明をもう一度、生むとか。

なんか、すげーな。

母。

「俺はお前と同じはずなんだ！どう間違えたんだ？どうすればよかったんだ？・・・俺は、ギロチンカッター様に愛されてたのか・・・？」

ベリアルブレイドと僕はにていないようで、似ているかもしれない。

だからこそ、言ってやらなければならないことがある。

「愛されてなんかねえよ。たぶん、お前はな。ギロチンカッターは怪異を否定していたんだ。お前は利用されていたに過ぎないんだよ、ベリアルブレイド。ギロチンカッターの使命の為の刃物だったんだ」

「嘘だアアアアアアアアアアアアアアアアアア！じゃあ、なんで俺を拾った！なんで、俺を育ててくれたんだ！」

ベリアルブレイドは大鎌を持って僕に向かって、走ってきた。

その速さは、人間とは比にならない。

こういった場数は確かに多い。

だけど、相手があまりにも違いすぎる。

人間の不良と怪異の不良。

字面がにてるけど、運動神経がまず違うんだよなァ。

まず、頭に角が生えてるか生えてないかの違いだがね。

尻尾もな。

僕はベリアルブレイドの攻撃を鋸鮫で受け止める。

そして、バールを振るうかのように弾き返した。

ベリアルブレイドの顔には、驚愕の色が浮かんでいる。

ゴールデンウィークの僕と偉く変わっているからだろうな。
ゴールデンウィークの僕は攻撃をかわさなかった。
諸に食らってましたからな。
「バケモノォォォォォッォォ！」
自分も悪魔なくせによく言うな。
ベリアルブレイドは恐怖を浮かべて、走り出そうとする。
しかし、扱けた。
きくねがこかしたのである。
8本の尻尾をゆらゆらと蠢かせ、腕を組んでいるので威圧的に見える。
「わらわの妖魔が化け物であることには変わりない。しかし、下賤な輩よ。わらわの妖魔にそのような口を叩くとはいい度胸じゃないか」
きくねはニッコリと笑って、ベリアルブレイドを頭から食べ始める。
グシャグシャ。
グチュグチュ。
気味の悪い音が響くけど、僕は嫌悪感を覚えない。

自分だって、化け物であるんだし、生きる為には食べなきゃいけないのだから。

食べ終えると（きくねは早食いらしい。怪異だから、スタイルを維持できてるのかな？）、きくねは血を艶かしく舌で血を舐め取り、僕の元に駆けて来る。

「お前、なんでわらわの元に走ってこない？」

きくねは頬を膨らませて、怒っている様子。

期待に添えれなくて、ゴメンナサイ。

「まあ、良い。・・・お前が無事なだけ、よかった」

鋸鮫を左肩の痣に戻す。

きくねが何を言ったのかは、よく聞こえなかったけどね。

恭子がいないので、惚気たような雰囲気になると思われた次の瞬間。

「なんていうかねえ。僕としては、惚気てるお二人さんの邪魔をしたくないんだけど、こっちも仕事でね。『修羅月夜の君』なんていう、大物を逃す訳にゃいかねえんだ。・・・あ、羽衣狐には手ェ出さないよ。いくら僕とは言え、アンタみたいなのを敵に回すのはいささか、面倒なものでね。」

「誰だ、お前」

きくねは訝しがるようにして彼を見る。

真っ黒な髪。

真っ白な肌。

真っ赤な目。

真っ黒なファーコート。

真っ黒なスラックス。

真っ黒なサンダル。

男は言う。

忍野を思わせるような軽快な声で。

「僕は黒神カオル。忍野メメの元・助手で現在は悪魔の専門家をしているものさ。ハジメマシテ、デビルマンのような阿良々木先輩の息子さん」

黒神は北白蛇神社の屋根に月をバックにして立っていた。

二ヤリ、と口角を上げて彼は笑っている。

これが、ゾーマやエスタークやミルドラースを知った、かつてのドラクエ５のプレイヤーの気分なんだろうなあ。

## きくねサーヴァント０４（後書き）

はい、真のラスボス登場です。
カオルくんは被の主人公なのですが、かってながら被は消去させていただきました。
内容に不備があるようなので、また改討版を書きたいと思います。

## きくねサーヴァント05

黒神を見るきくねの目は恐ろしいものだ。

「き、きくね・・・？」

恐る恐る、僕は呼びかける。

きくねはくるり、と僕に振り向いた。

「なんじゃ？わらわの可愛い妖魔や。このような奴に、わらわはお前に指一本触れさせん」

「すごい、愛されているんだね？修羅月夜の君。僕も似たことがあったなあ、義理の姉貴だったけど」

黒神は軽快に境内に座っていた。

そういえば、ここには『よくないもの』の吹き溜まりではなかったのだろうか？

彼もどうやら、専門家のようだし。

「なあ、あんたは大丈夫なのか？ここに居て。よくないものがいるとかいないとかって聞いたんだけど・・・」

「そうだね、前までは居たんだ。でもね、不思議なことに君がこの町にやって来てからそれらは全て、消滅してしまった。伝説の吸血鬼、元キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード

の最後の一人の息子にして、『魅了と創造』を受け継いだ、息子。
一流の専門家すら、敵うことができない。
僕に色々教えてくれた人がさ、修羅月夜の君について言ってたことがあってね。」

何かがおかしい。

この人がこの人でない気がする。

気付けば、僕が鋸鮫を両手で握っていることに気付いた。

しかも、かなり震えている。

僕は怖いのだろうか。

「・・・で、僕を始末すると」

「そのとおり。」

「そうはさせんぞ。」

きくねが一歩一歩、黒神と距離を詰めていく。

9本の尻尾を揺らめかせ、その小さな頭からは狐耳がひょっこりと生えている。

目は殺気を放っている。

「わらわの妖魔を殺す？はっ、ふざけた事を抜かすな。小僧、お前がなんなのか、わらわは知っている。

お前、わらわの妖魔と同じ、四分の一が吸血鬼なのじゃろう？見たことがあったわ、わらわはそういった奴を。ちょうど、わらわを殺した奴と似ておった。可愛い清明のために、現代に蘇ったのはいいが、お前らのようなのがいると、生命を生むことは出来ん。わらわの為に、わらわを救ってくれた清明を」

最後の言葉を言う時、きくねが女の子と言うより、母親の表情だった。

黒神はそんな様子を見ていても、ゲラゲラ笑っていた。

「知ってるかい？羽衣狐。輪廻転生って奴を。人間は死ねば、巡りに巡る。僕らが君たちとであったのも、また運命だったのかもしれないね？前世の因縁って奴だったのかも。でもね、君が驚くような事だって起こるんだ。君を守ろうとしている、その彼が自分のかつての息子だったりする可能性だってある。」

黒神は明らかに、怪異の上位の存在である、きくねを誘っている。

きくねは余裕そうだ。

「はっ、そんなの知らぬわ。そうだとすれば、わらわはわらわの妖魔を愛すまで。わらわを護ってくれる、わらわだけの者。誰にも渡しやせぬわ。ふざけるな。お前がいくら、わらわを挑発しようと、わらわはそんなのもには乗らん。わらわは、ただ三ヶ月と生きたいだけじゃ。それだけでも駄目だというのか？」

きくねは啖呵を切る。

僕としては、ここで死にたくない。

もっと、きくねの傍にいたい。
もっと、きくねと過ごしたい。
そして、――――もっと、きくねに愛して欲しい。
「そうね、そこの子の言うとおりだわ。とりあえず、私の息子に手を出さないでくれるかしら？三ヶ月くんはいい子なのよ。私の言うことに逆らいやしないし、私がして欲しいことはなんだってしてくれる。
たとえ、この子のお父さんがこの子が死んでしまったから、私に怒られる！・・・と思って、蘇らせたのだとしても、別に構わないわ。だって、どんな風になろうと私の息子ですもの。可愛くて、私の愛しい人に似ている、可愛い三ヶ月」
その声は、母さんだった。
２３年前と変わらない美しさ。
黒神は微動だにしない。
一番気になったのは、手に握られている――――両手で２０枚あるであろう、札。
「まあ、過去に行っていたことを知った時は驚いてしまったけれど、僕の息子ならやりかねねえや。
大分趣味も似てるしよ。ここで、引く気はねえか？黒神」
母さんの横には父さんがいた。

１７歳の姿になった、おねえちゃんを従えて。

父さんは、黒神を知っている？

「よう、三ヶ月。長い旅、ご苦労さん。まさか、僕もお前がタイムトラベルするとは思わなかったぜ。心配かけやがって」

「と、父さん・・・」

涙が出そうになる。

２３年前と変わらない、身長。

僕と８ｃｍも差がある。

黒神はさっと立ち上がった。

「先輩方にいわれると、気が引けるなァ。ま、諦めるかな。・・・僕の望んだものが見れた気がしたよ。ありがとう」

黒神はそのまま、姿を消した。

## きくねサーヴァント05（後書き）

次回で最終話です。
わずか、2ヶ月と少しでしたが、化物語（次）をよんでいただき、
ありがとうございました。
前日談を書くことがありましたら、そちらもよろしくお願いします。

## きくねサーヴァント最終章（前書き）

ついに、最終回です。

## きくねサーヴァント最終章

その後、僕は両親ときくねと恭子と共に家に帰った。

しかし、卯月の姿がどこにもない。

「あのさ、卯月は何処？」

「卯月？誰だ、それは」

父さんは首をかしげる。

卯月を覚えていないのか？

「三ヶ月くん、疲れてるんじゃない？長旅だったものね・・・」

「ち、ちがうっ・・・」

僕の言葉をさえぎるかのように、母さんは僕の頭をわしゃわしゃと撫でる。

かつてないほど、優しげな目で。

「貴方は寂しかったのよ。今回、貴方が消えてしまってから貴方の事についてお父さんと考えていたわ。

私達、少し貴方を放置していたかもしれないって。」

きくねと恭子は、僕の部屋に居る。

父さんが許可してくれたのだ。
一緒に暮らすことを。
このことについてだけど、「娘がまた出来たーっ！神原に報告だー！」と大はしゃぎ。
どれだけ、駿河のおねーちゃんが好きなんですか・・・。
羽川さんとも電話してるけどね。
かなりの頻度で。
「一つ気になってたんだけど」
「なんだ？」
僕の中からこみ上げる熱い何か。
今まで、感じなかった熱いもの。
「・・・この僕、阿良々木三ヶ月は一度死んだんですか？」
悪魔の専門家・黒神カオル。
対悪魔の悪魔にして悪魔の専門家・ベリアルブレイド。
この両者には、共通のことを言われた。
『お前は一度、死んだことがある』と。

両者曰く、『父親はアララギ・ミカヅキを自分の都合のために反魂の術で蘇らせた』と。

本当のことならショック。

本当のことなら嬉しい。

だって、愛されてるってことだろ？

「・・・ああ、僕が蘇らせた。いけないことだって分かっててもお前を失いたくない。たった一人の息子だからな」

そういうことなんだ。

よかった・・・。

「それを聞いたとき、驚いて貴方のお父さんを殺しかけるところだったわ。妬くわよ、三ヶ月くん・・・」

ジーっと母さんは僕を見る。

ホントに嫉妬してるよ・・・。

ツンデレなのにね。

僕の母は。

「お前はどう思う？蘇れてよかったのか？嫌なら、謝るよ。謝っても許されることじゃないと思うんだけれどな・・・」

違うよ。

僕は嬉しいんだ。

「悪くなんかない。むしろ、嬉しいよ。都合よく記憶がなくなっていたとしても、それはそれで構わない。僕は二人に愛されていると実感できて嬉しいし、そのおかげで彼女が出来たのが嬉しくて仕方ない。」

「兄貴！」

「にいに！」

なんだか、僕に似てないようで似てるような双子の女の子が僕を抱きしめてきた。

背の低い一人はワンピースの上にカーディガンを羽織って。

背の高い一人は明るい色の着物を着て。

「兄貴、私に黙って旅に出るなんて、おかしいよ。私と結婚してくれるんでしょう？」

僕に頬擦りしてくる背の低い妹、如月。

ちなみにツリ目。

アレ？こんな妹居たっけ？

忘れちゃったよ。

「ず、ずりぃよ！あたしの面倒見てくれんだろ？にいに♪」

僕より背の高い妹、神無月は僕の背を抱きしめる。

「にいにの背中、ちっちゃいな♪可愛い」

すごく、嬉しそうだな・・・。

その光景を見て、誰か――――――僕の父は言う。

「僕に似たな、三ヶ月。妹にプロポーズされるとは、さすが僕の息子だ。」

どこからともなく、影から現れたおねーちゃん――――忍野忍は父さんの影の上で胡坐を掻き、呟く。

「それ、似ていいことなのじゃかのう・・・」

後日談、というか今回のオチ。

翌日の事だ。

僕はいつも、家族の誰よりも目を覚ますのが早いので、如月（きさらぎ）と神無月（かんなづき）をたたき起こした。

・・・無論、キスで。

「にいに～！」

「兄貴〜！」

二人はそろって、寝巻きで声を揃えて言う。

「責任取ってよね！」

バタン、ときくねが入ってくる。

「それはさせぬぞ。ミカヅキはわらわのものじゃ！」

「なにおう！」

「にいにはあたしのものだ！」

「お兄様は私のものです！」

如月＆神無月ＶＳきくね＆恭子はお互い、にらみ合っている。

「「「「ねえ、誰が好きなの！？ミカヅキ（兄貴（にいに（お兄様！？」

・・・これが、僕の求めていたものなのかもしれない。

## きくねサーヴァント最終章（後書き）

このお話を持ちまして、化物語（次）は完結いたします。
ただ、これが最後なのではありません。
三ヶ月くんが怪異に出くわした話や、如月ちゃんと神無月ちゃんや三ヶ月くんの先輩の混同篝さんについても書きたいと思います。
他の「とある雷光の白銀夜叉（ＷｈｉｔｅＯｒｇｒｅｒ）」や、「探偵（♂）と魔王（♀）の探偵事務所」、「ある吸血鬼の最凶の使い魔。」などもよろしくお願いします。
この作品から、読んでくださった皆様が何かを感じ取ることを祈りつつ――

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3548v/

---

化物語（次）

2011年9月17日17時07分発行